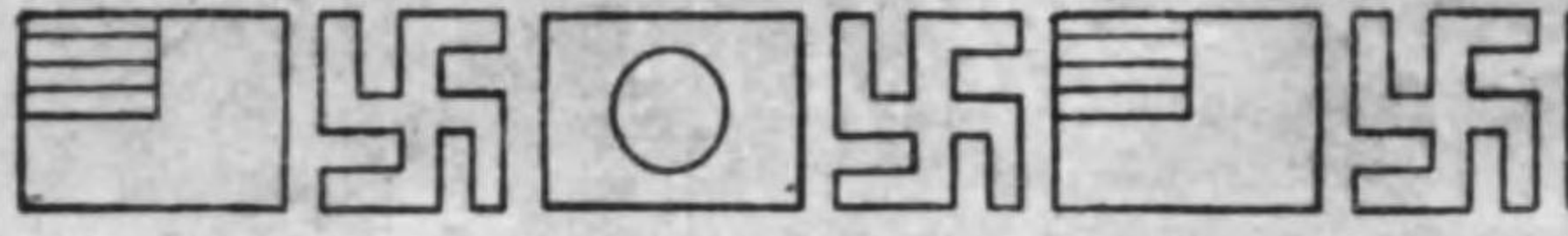


105



特248

965

文學博士 本多辰次郎著

北支滿鮮旅行記

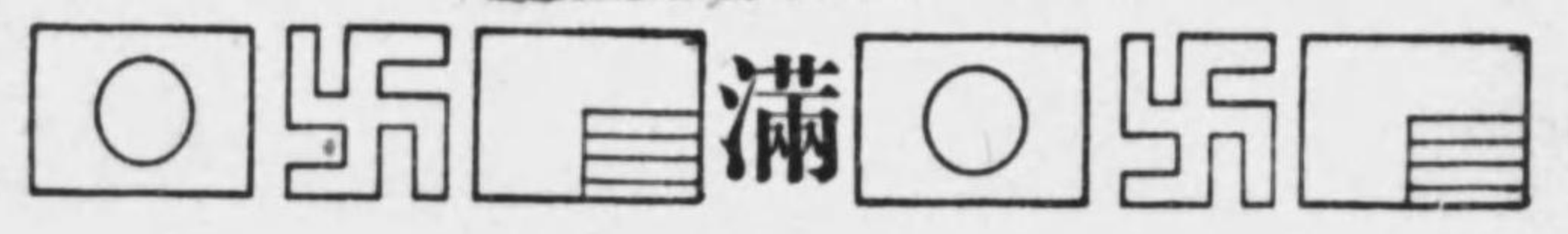
第二輯 日滿佛教協會



始



特248
965



鮮
旅
行
記



北支滿鮮旅行記

文學博士 本多辰次郎

出 發

予は日本内地は可なり能く旅行した方かも知れぬが、未だ曾て一步も海外へ踏み出したことはないから、壯歳の時分には一度は歐の山、米の水を賞し古英雄の勳業を建てた跡をも訪ひ、希臘・羅馬の古文明に接し、現時の文化を目撃し度いものと、憧憬して居りました。従つて多少其の準備に心懸けて居つた事もありません。然るに年移り物變はり、自分も老の迫るに隨つて、其の希望も大いに薄らぎ、假令歐山米水を跋渉したかとして、西洋の文明に接したとて、左のみ自分専攻の學に益する所多くもあらぬやうに思はれ、史料蒐集等に努むるも、是れ亦言語の不熟、若しくは不通なる關係上決して決して好成績を納むることは望み得ないことは必然であらう、是等は其の道の機關や、堪能な人士に委して置いて、自分等の如きは悠々漫遊して、洞庭の明月、瀟湘の山水を賞玩して、周郎、謝玄活躍の蹟を訪ひ、李杜や韓柳歐蘇の遊蹟を探り、四百八十寺の巡禮でもした方が益しであらうと思ひ、一旦清暇を得たらば、是非此の望みは果したものと考へて居りました。然るに官仕への身とて、久しく其の希望を果し得なかつたが、今茲七月末に

骸骨を請ひ、身心共に閑暇を得て、扱是れから多年の希望を果さんと思へば、古人の所謂樹靜まらんと欲すれば風止まずとかや、萬事が都合好く行かぬもので、日支の國際圓滑を缺き、南支地方は動もすれば危険の處がある。之れに引換へて、北支地方は親日派の黃郛氏局に當り、一切心配なしのこと故、予は必ず南支に限るといふ譯もない、北支の風景文物も決して捨てたものにあらず、北平紫禁城の建築の如きは英京、佛都の建築とは趣を異にするも、其の規模の宏大なる、其の配置の正整なる、其の技術の巧妙なる、實に東洋文明を代表し、且北支は支那文明發祥の地で、東洋文化の淵源を訊ねる便宜も此の地に存するか、北支結構、其の方に巡遊すべしと忽ち心境に變化を來した。併し夫には頓と準備が出来て居ない、今年も旅行準備を爲し、豫備知識を得た以後にするを適當とするが、一方に遊思矢の如きものあり、又本年ならば對支文化事業部にて便宜を與へて貰へると云ふ都合もあり、種々の點から今年と定めた。シテ其の旅行の範圍は如何に期間は何に考へると、範圍は兎も角、期間に於ては官命を負ひて行くと違つて、大いに家庭の事情に制せられざるを得ないので、一ヶ月と定め、範圍は近時邦人は大いに滿洲國に進出發展する實狀にあるから、之れを視察するも亦無意味ならずとし、遂に北支・滿・鮮と定めた。夫は朝鮮は我邦と古く緊密なる關係交渉があり、國史の研究には朝鮮視察の必要なることを豫て考へて居たからでありませぬ。

扱旅行の範圍と期間は定つたが、予は今猶身骨衰老を覺えないけれども、既に年齒耳順を踰え、性來蒲柳の質であるから、一人旅行は親戚知人之れを憂ひ、又妻文之は豫て支鮮の觀光は希望して居る所であるから、相携へて出發することに決した。昭和八年九月二十二日大凡旅行準備を調へ終つたから、家族一同

明治神宮に詣し、暫時内地を離るゝ決意を奉告し、辭訣して歸宅し、二十三日及び二十四日中を猶準備に費し、二十四日夜出發の時を待つて居りました。

是れより先予は書を大谷派本願寺宗務總長阿部惠水師に飛ばして、我等が旅行の目的を告げ、旅行地方に於ける同派在勤者を督して便宜を與へられんことを依頼しました。同師は即座に快諾して、駐在布教師並に別院輪番等に訓令を發し、我等到るの日努めて便宜を計るべきことを命ぜられた。其の地は支那に於ては天津、滿洲に於ては滿鐵沿線各都市である。是れに依つて此の度の旅行に大いに便宜を得たので、深く謝する所であります。

昭和八年九月二十四日晴、午後七時夫妻相携へ二輛の自動車に打乗り、親子、久子の二女及び近隣の親戚等に見送られて東京驛に至る。同所には妻の花道の師友等の見送りあり、上野松坂屋店員の見送りあり、八時二十五分是等の諸人と別れて特急車にて神戸に向ひました。

二十五日晴、朝七時二分京都驛に下車す、大谷派本願寺より差遣の録事圓山千之師及び承事一人に迎へられて、自動車にて同寺宗務所に到り、參務龍山嚴雄師と會晤し、兩堂に參拜しました。是の日會々彼岸中なるを以て、參詣人も多く、御眞影も開扉せられてあり、又晨朝勤行中なるを以て、法主臺下の出仕も有つて、頗る好都合に感じました。直ちに同寺を辭し、驛に到り八時十三分急行列車に乗じ、圓山師等に辭訣し西走し、三ノ宮驛に到つた。繰返して云ふが本願寺に於て本尊阿彌陀如來を拜し、宗祖の靈像を禮するも、明治神宮を拜せしと同じく、單に報恩辭訣の意を表するに止まり、旅行の無事を祈る意思是毫末も無かつたのは、是れ聊か他宗の人と異なる所かと思ひます。

九時二十六分三ノ宮驛下車、直ちに客待車夫の勧めによりて二臺の人車に乗じて埠頭に着した、自動車もあるが、車夫の言ふには、自動車では直ぐ船までに行けないから、人車の方が宜しいと言ふのを信じて、人車にした。果して車夫の言の如く、人車は舷側まで進んで、荷物も船に積み込んで呉れ、且賃銀も比較的低廉で有つたから、旅行に出懸けた最初から、本願寺と言ひ、人力車と云ひ、誠に都合よく親切に取扱はれたのは、幸先よしと喜びました。

我等の乗船北嶺丸は近海郵船會社の持船二千六百噸で、天津通の船では噸數から言へば大きな方で、且碎氷作用を爲す所の新型船であるけれども、何分貨物の積載を主とした物と見えて客室は狭く汚く、設備も頗る不完全のやうに感じました。乗船後間もなく、正十一時を以て油の如き瀬戸内海の穩波の上を滑り出でて徐かに進行を始めた。十二時には食事を報じて來たから、食堂に趣くと、日本食である。私も喜んだが、妻は尙ほ喜びました。四日間洋食では困ると思つて居た所であつたからである。午後は甲板に上り、四方の風光を展望しました。實に此の海に遊覽客の多いのも、又國立公園と決定せられたのも有理で、兩側に色々の形をした島嶼の羅列する間を、縫つて蒼波を凌ぐ勝景、ましてあの邊は佐々木盛綱が淺瀬を渡つて功を立てし處、左の四國側にあの邊に水城やあらん、八島、壇之浦は何れの所ならんなどと史蹟に思ひを寄せて進む、其の風景の美なること、想像の愉快なること、まして夕陽西に春かんとするの際激々たる蒼波に映じ、島嶼を照す光景、何と形容して善いか、予の如き秃筆の顯はし得べきでないことは勿論、巧なる畫伯も之れを描出する術はあるまいと思はれた。腰折二首を拈出しました。

雲と水連るあたり帆前船

月の世界をさして行くらむ

天つ神あもりましけるその昔

かくやと思ふ夕映のそら

二十六日晴、早曉起床甲板に登る。右側前方人家稠密の所を指して水夫氏に尋ねると三田尻と答へた。海氣清爽穩波遠く連り、快言ふべからざるものがある。六時三田尻沖通過の際漁船に遮られて停船二十分程にて進行を始めた。須臾にして船聊か動揺し、復た停船した、我等は當時船室中に居たけれども、何事かと訝り甲板に登つて見ると、前面に漁船が一艘破碎せられて横はつて居る。抑是等の漁船は、數隻舳艫連繋して長さ一町餘にも亘つて居る、恰も大船の航路の前面に横たはり、殆ど直角に交叉する位置にあるので、遂にコンナ始末になつたのである。されど唯一艘破碎せられたに止まり、人命に別條の無かつたのは不幸中の幸と言ふべきであらう。停船殆ど一時間で進航を始め、九時頃門司港に入つた。

門司埠頭に着くと、石炭を満載した和船三隻北嶺丸の舷側に寄り來り乗込み來つた人夫數十人各自手籠一個を持參し、之れに石炭を盛り、轉傳して北嶺丸に積込む。其の技の駿速なること實に驚くばかりで、一時間以内に二百十噸の石炭を移載せしめた。又臺灣産バナナを北支に輸出する爲に、一旦此の港に持來り、此所より天津に送るのであるが、幾百のバナナ籠を起重機で積み込む、其の手際の巧なること、其の數量の莫大なること、眞に話の様である。その他林檎、石油等、船も沈まんばかりに多量に積み込んだので、人間は實際貨物の御供に過ぎない觀がある。此の間用事の有る人等は上陸したが我等は此の地に用は無き故、船中で荷物の積込位をボンヤリ見て居るに過ぎなかつた。手紙の投函や果物の買取など皆給仕に

命じて、用は足りた。さるにても斯く北支に輸出せらるゝのは結構な事である。
午後二時少し前船は解纜して外洋に出たので、船體稍動揺を始めた。三時には本洲はもはや眼界から消えて九州のみ左方に見えるやうになり、一浴して晚餐、食卓に就いた頃は玄海灘にかゝり、風は船の側面を吹き、波濤漸く高く、船體横様に動揺し、機關の音荒波を切る響、風波逆捲く音響と相混じり、恰も家郷に在りて、池上本門寺の會式の雜踏鼓音を聞くの感があるとして妻と話し合つた事である。其の間に何時しか眠に落ちて夢は見たりや否や、曉前に目を覺した。

名も高き玄海灘を打ちわたり

夜もすがら聞く大濤の音

波の音船のゆるぎも物とせず

乗り切るこよひ心地よきかな

憂ひたる海もことなく打ちこしぬ

行くさき見えて心落ちあぬ

是れ二十七日朝の感じを其の儘告白したのである。開けば船客中船暈に惱まされた人が少なくなかつたといふことである。

二十七日晴、朝六時起床して洗面を了へ、甲板に登れば、多數の島嶼が左右に見える、これは朝鮮海峡に懸つたのである。御蔭で波靜かに船穩かたで、船客も身成を作つて甲板に出で、昨夜のしげに弱つた話などし合ひ、我等は船に強いと賞められました。三島(前名巨文島)を左方に望み、曾て英國が此の島を一時占領

した當時を回想して、今昔の感に打たれざるを得ないのである。前方遙に濟州島が見える。予は出發前に絶影島の發掘物に關する報告考證を閲讀したことが心に浮び出て來たから、船員に之れを尋ねたが、明に夫れと見定むることを得なかつた。是の時、時計を直して二十分後れしめた、徑度十五度程西進したのであらう。

午後一時頃より海水黄色を呈して來た、併しまだ黄海では無い、唯島に近づいたからであらう。島嶼は皆綠色で氣持が宜しい。最寄の島中に白斑二點有つて動いて居る様子が見へる、白衣の鮮人群で有らうか、將た又山羊群であらうか。

古への任那の跡をのぞみつゝ

船にまかせてはしる海原

四つの船通ひし路やこゝならむ

乾の風になやまされつゝ

正午過黄海に入る。風荒み波高し、海面黄濁にして見るも不快である。爲す業もなく聊か讀書を試みても、暫時にして倦怠を生ずる、物を認むることは船の動揺で出來かねる。致し方なく日のまだある中から床に就いたが、一睡の後夢覺めれば聊か波も穩かに成つた様に覺えた。

時々夢をさまされ聞くものは

なみ切る船の音のみにして

黄海は名の示す如く、海面黄濁なるは支那の土壤は黄色にして水に融け易く、黄河・白河等より盛に黄

土を注入するより起るのであらう。兎もあれ日本の内海あたりの蒼波穩かに揺ぐ光景を見る快感は起り来ませぬ。

二十八日晴、五時半起床、天氣は晴朗なれど波は猶高い。昨夜西北風が強かつた爲に、航進時速七八哩より出せず、豫定時刻より遅るゝこと三時間なりとの事、航海も既に四日となり、乗客も互に知り合となり、又船長事務長等とも近付となり、話合ふやうに成つた。一等客には天津領事として赴任の齋藤晋次氏の一家族、又在天津の正金銀行員畑良一氏夫人及び我等兩人と西洋人三四人等有つた。西洋人は皆船に強いやうで有つた、我等も幸ひに船暈は免れました。

午後二時山東角に來た、是れから渤海である。威海衛は此の山東角の内に灣入の地點であり、今は燈臺が有つて海路を標すのである、威海衛と聞いては日清戦争の記憶が油然と湧いて来る。

一時は名をとゞろかしたる威海衛

今やいづくのまもりなるらむ

夕景に至り同地燈火見ゆ。十一時頃に至り、旅順燈臺の燭光を遙に見ることを得たが、船體頗る動揺を初めた又暴風である。シケも是れで三度目である。動揺は縦に前後にゆれる氣持は多少樂である。併し船の動揺する時は極めて安靜にして居るが最もよろしいのでベッド中に静臥して居た、風浪荒きたために航程二時間を後れたりといふ。又斯く一航海に三度もシケのあることは稀有であると事務長の話で有りました。二十九日晴、朝六時起床、洗面、喫茶、剃鬚を終へて甲板に出づ、風は稍鎮まり、西方陸に近づいたが、海面は益々濁して來た。午後一時に漸く塘沽沖に投錨した、待つこと殆ど一時間にして出迎へのランチが

來たので、之れに乗じて塘沽に上陸したのは三時過であつた。白河といふは揚子江や黄河の如き長大な川では無いが、夫でも幅の廣いことは想像の外で、海と河との境界が分らぬ位で、幅員に於ては幾萬噸の大船でも天津まで遡江するに差支ないが、海底が浅く、餘程大潮の節でなければ二千噸以上の船は遡航出來ず、ランチに乗るのである。此所は彼の明治三十三年北清事變に際して白石段江中尉が先登徒渉して上陸し、殊動を奏した所である。併し其の風景は最も殺風景極まる所であり見る物不快の種ならぬは無いといふ有様である。水は黄濁で土腐の如く、地は黄土で一望遮る物なく、草木も凸凹もなく、人家らしき家屋なく、唯見る物は埠頭にたかる支那苦力、四方も屋根も黄土のみで作つた大小屋然たる人家の點々たるのみ、上陸の際前面に集まれる苦力等の間を排して出で来る者は、支那税關吏及び天津旅館の宿引である。是等も好感を興へるものではない。我等は天津では大和ホテルに投宿せんとの心組で有つたが、生憎同ホテルの案内者は來て居ないので、便利の爲又船員等の勧誘もあり、遂に扶養館に投宿することに定めて、荷物の取扱は悉皆同館の案内者に委托して塘沽驛に入りました。税關の検査は無事に済んだが、後で見ると紛失物の有つたのと、トランクを痛められて有つたのは、旅での痛手であつた。

塘沽驛には數人の日本兵士が警備に屯集して居るのを見て大いに人意を強うし、始めて愉快な思ひをした。次に發車するまでは二時間餘を待たねばならぬが、何等見るものも聞く物もなく、唯天然の土壤の外には海岸に積んである石炭と貝殻の堆積のみである。

六時過天津行列車に投乗した、此の邊は北清事變以來各國の警備區域となり、汽車には佛國兵士が警備に當つて居た。

廣軌鐵道には始めて乗つたが、車内廣く、椅子と椅子との間に二尺と三尺位のテーブルがある。(これは一等車に限る) 讀書、認め物、飲食物等の臺と成つて便利である。時々給仕が雑巾を持つて車内を掃除する、茶を持つて来る、暖めたハンカチーフを持つて来る、手や顔を拭つて見ると氣持は善いやうであるが、一種の臭氣が鼻を穿つて厭に感じたから其の後は止めた。さるにても汚穢を厭はぬ支那人としては此の清掃は不審と思つたら、之れは各國との條約の義務が有つて爲るのであるとの事である。斯くて八時過天津驛に到着した。これで先づ目的地に足を踏み込みました。

天 津

天津は言ふまでもなく北支那の玄關である。大清帝國の榮えし昔は最も繁昌して、日本で言へば横濱港に相當して殷賑なることも横濱を凌駕する許りであつた。九月二十九日午後八時過天津驛着、船中で近付に成つた畑夫人に分れて自動車に打乗り、旅館芙蓉館に到り、導かれて一室に落着いたが、一種の支那的臭氣鼻を穿つて不快なりしも、今はソナ事言つて居る時で無いので、直ちに天津本願寺輪番の安田湯然師に電話を掛けて到着を報知し、入浴などして居る間に來訪せられた。同師は予の舊知ではあるが、既に隨か二十幾年も面會せぬ故、老けられて面忘れした、先方も同感であらう。豫て大谷派本山からの通知もあり、又淺草本願寺輪番沼波政憲師からの依頼も有つたから待つて居たとの事で、互に久淵を謝し、二三雑話を交へながら食事を終へ、直ちに安田師に導かれて、夜の市中見物を爲した。日本租界の目抜の場所、及び公園を觀光し、天津神社に詣した。一體近時は大いに排日抗日氣分も緩和せられたが、併し猶幾分其

の氣分があり、又最近民國で關稅を上げたのと、銀價暴騰で爲替が變動したので、密輸入が夥しく増加し、正直な商人は頗る不利な立場に陥り、洵に市場は火の消えた様な光景であるとは、既に航海中の噂にも聞き、今又其の話に接した。我等は従前の事を知らないから比較は出来ないが、相應に繁昌し、市街も整然として善い都會である。十時半頃歸宿して就寢した。

三十日晴七時起床、九時車を列ねて福島街なる天津本願寺に安田輪番を訪問した。同別院は明治三十六年八月滋賀縣人富永寶堅師が前任地朝鮮仁川より移り、日本民團共同祭所なる物を創設し、在留日本人ならば宗教の如何に關せず、神道でも基督教でも構はず葬祭を執行した。當時場所も他に在つたのを、四十年今の地に移轉して堂宇を建築し、大谷派本願寺の別院とは成つたが、單に天津本願寺と稱して、派名を稱しない。目下は曹洞・日蓮・眞言等は各自其の宗の寺院が出來たが、餘の佛教諸宗派の人々は矢張従前通り此の別院で葬祭を營むので、維持費は民團からも支出せられるといふことである。向つて本堂の左側に並んで太子堂があり善い別院である。

次に安田師に導かれて視察觀光に出掛け、第一天津中日學院に到り、來意を告げて參觀を申し込んだ。院の總長細江眞文氏は快諾して自ら案内の勞を取り、親切に詳細に説明せられた。抑此の學院の創立は十三年以前に在つて東亞同文會の施設である。目下は外務省の保護の下に在つて、日本で言へば七年制高等學校に相當する組織で、修業年限は六年で尋常小學校卒業者を入學せしめて、卒業後は支那の大學に入學せしめる。生徒は日支兩國人であるが、勿説支那人が多い。外國語は日本人には支那語、支那人には日本語を課するので、教員も兩國人があり、日本人は日本語、支那人は支那語で教授する。教課書は多く支那

語である。卒業する頃には立派に日支兩國語が使用出来るやうになる。日本内地よりも外務省から送られて来て入學する者があるが、成績は極めて優秀であるといふことである。之れは或は外務省から、優等生を選抜して送るのでは無からうかとの疑ひも起つた。此の際一寸認めて置くのは岩佐忠哉といふ人である。此の人は岩佐男爵の親戚の人で、大阪外國語學校を卒業後、語學練習の爲、奉天に留學すること既に一年有半、語學も大部上達したから、今回北支視察を志し、大阪外國學校の屬託として來津せられ、我等より一步前に中日學院に到着せられたのであるが、共に參觀し、共に説明を聴取した。此の人とは後に共に北平を視察して通辯を煩はした事があるから、此所に點出して置く。

却說中日學院は其の敷地は三萬餘坪あり、教室も種々の特別教室も揃つて居て、理化學の器械・標本等十分完備して居り、運動場、運動器械等の設備も行届き、農業の實檢所なども行届いて居る。

次に總領事館に至り、總領事栗原正氏に面會し、來會を告げて視察に便宜を與へられんことを依頼した。同氏は親切に副領事等を紹介し、昨日齋藤晋次氏着任して自動車一臺を専用して居て、自動車が少ないが、何とか都合を付けやうとて、午後は自動車一臺を提供し、案内人として書記生を命じ、且佛蘭西ミツシヨン經營の商工學校博物館參觀の紹介状を與へられた。ソコデ午後一時半の再會を同書記生に約して、中原公司に至り午餐を饗せられた。同公司是支那人の經營で本舖は上海に在り、天津は支店であるがそれでも當地一番のデパートメントで、建築も七階建てで日本租界に君臨して居る。料理も自慢との事にて、成程風味が優れて居るやうに感じた。ソコデ書記生の來訪を受けて、自動車に同乗して當地の名所たる競馬場に到つた、同場は會員以外の者には入場せしめぬ規程との事なるが、案内者の交渉が上手で有つたと見えて、

門衛の印度人巡查が許可して呉れたから、入場して見ると、恰も安田師の知人で會員たる田中昌次郎氏の在るのを見て、挨拶すると、同氏は得意に同場を案内して詳細に説明せられた。同場は東洋第一の大競馬場で、其の地積は廣袤三十萬坪、樹木少き當地にて綠樹も多數に茂り、青々たる芝生あり、夏季に際して之れを枯死せざらしむるだけでも、頗る多額の經費を要すと。觀覽席は宏莊なる建物で三階建てであり、競馬場として設備萬端完備せるのみならず、俱樂部として娛樂の具を設け、會員は常に來遊し、家族も來て交情を温むと。其の初め獨人デッドリング此の地を相し、經營を創めたりと。當時猶此の地他に人家なく荒寥たる原野で有つて、匪賊の出沒ありたるを、デ氏獨り家屋を建築して來住し、四壁には匪賊防戦の爲に銃丸を通すべき穴を穿ち居れりと。後デ氏の女婿ハンネツケン氏繼いで住せりと。デ氏今當地に於ては草分として徳大人と稱せられ、頗る感謝せらるゝとの事を聞く。デッドリング及びハンネツケンとは日清戰爭の終末に際して、兩國講和の斡旋の爲に來朝せしが、我が國の拒絶に遇ひ、早々退去せし獨人なれば、其の記憶を語りたるに、然り其の人なりとの答へを得た。我等は當時來朝の無謀なるを嘲り、先の見えぬ毛唐人であると思つたが、何ぞ圖らん識見高邁にして、度量寛宏、加ふるに雄偉にして先見の明あり、此の大規模の事業を創始し、後昆に追慕せらるゝと聞いて驚いた事である。田中氏は軀幹矮小なれども眼睛俊銳にして能辯の氣焰家なり。説明に次いで滿洲國の前途に關して、頗る悲觀説を陳らる、總じて在滿日本人などにも悲觀論多きは、是即ち我苗の碩なるを知る者なしとの理由だらうか。

二時過同所を辭して、東亞病院に立寄り、林氏を説明の通辯として商工學校に到る。林氏は安田師の知人にて支那人なるも我等に對してハヤシ某と自稱せしを奇に感ぜしが、日本人に對して林をハヤシと稱す

るは滿洲・北支等にては普通の事の由、本校は上述の如く佛國ミツシヨンの經營なるが、同ミツシヨンは英租界の三分の一の土地を所有し、財政最も富裕、諸種の事業を營み猶餘資あり、夙に北支の動植物・發掘品等を蒐集して居る、故を以て歴史家・考古學家・生物學者等々皆來觀して一驚を喫する。過日も滿洲研究團の徳永博士一行參觀して驚嘆せりと。此の種蒐集に於ては世界第一と誇稱すとの事なるが、或は然らむ、近時蒐集の手を南支に伸さんとしつゝありとの事である。三時半同所を辭して歸宿す、是に於て日佛租界の大部分及び英租界の一部を觀光した、英佛租界は遺がに高樓軒を並べ、西洋都會の觀あり、日本租界も街幅廣く、電車通じ、洋館も多けれども幾分見劣りのせらるゝのは遺憾である。猶一つ遺憾なるは英佛租界は知らず、日本租界に於ては大商店は大部分皆支那人の經營である。隨つて財界の權は當然支那人が掌握して居て、日本人は中小商店で、賣藥店が最も多い。仁丹・大學目藥・ロート目藥・根治水等の看板は最も目に着く、味の素も中々廣まつてる様子である。森永の乳菓の看板亦大に目に着く。

初めて支那を見た我等觀光の所感を一二擧げて見れば、第一人力車の多い事である。人力車は我國の發明品であるが、今は支那の實用品である。支那製の人車は箱低く、柄長く、加ふるに裝飾多く、頗る乗心地が宜しい、併し乗つて居ても支那人の臭氣が鼻を穿つのは閉口である。往來を徒歩して居ると人車夫がウルサク付纏ふのは閉口である。夫も一人でなく、五人七人付いて來て八釜しく勤める、賃銀も安いから早く乗つた方が宜しい。

有閑人、我國で有閑社會と云へばブルジョアの事である、彼の有閑マダムが何とか歟とか云ふ如きが夫である。支那では貧富を論ぜず街路にブラ／＼と立つて居る。我國の立チン坊など云ふ連中とも違ふ、何か仕事を見付けやうとして居るのかも知れぬが、兎も角ブラ／＼して居る様子は吞氣相に見える。尤も是は家屋の構造にも多少因る事と思はれる。支那の家は土造で小くて彩光が宜しくない、夫に一家に多人數住まつて居るから、屋内で爲す仕事の無い時は、道路に出てブラ／＼して居るのであらう。雨季の外はメツタに降雨が無いから、それも善からう。

蒼蠅の多いのは閉口だ食物には是非蠅がタカツテ黒く成つて居る。彼等支那人は一向平氣で之れを追ひ拂ひつゝ食する、時々食物中より蒼蠅の屍骸を箸で挟み出したりはね飛ばして捨てながら食する。或は間違つて蠅を食しても平氣とのことである。曰く美味なるが故に蠅が群がるのである。蠅は本能として毒素を知つて居るから、毒藥等には蠅は決して群がらない、それ故に蠅のタカル食物を食して居れば、中毒の憂は無いとて、蠅を一向苦に病まぬのみならず、寧ろ歓迎する有様であるとの事である。

交通巡查、東京邊りでは交通整理は一大難事である。巡查が血眼に成つて職に當つて居ても折々事故を生ずるが、天津の交通巡查程吞氣な者は無い様である。大體人通りも少く自動車は稀に通るばかり、悠々緩歩する支那人や其の間を逢つて走る人力車位で、同地では自動車も馬車も少ない。夫に交通巡查の數が無暗に多い、交叉路で無くとも二尺位の楹棒を持った大兵肥滿の大力士然たる交通巡查が佇立して居る。全くゴウもストップも必要でない。ブラ／＼動き出して棒を振る様子は全く吞氣に見える。餘り智慧の總身に廻りそうにも見えぬ大男のみであるから、さる人に其の事を言つて見たら、それも道理日本租界の交通巡查は身長五尺七寸以上に限るといふ規程があるそうだ。英佛租界も可なり長大の巡警を見受けた。

後に聞いたが、かの岩佐忠哉氏が支那裝をして支那街に入り込んだら乗せて居る車力が日本人か支那人

かと聞く、虚言を言つても調べれば判知るから有體に日本人と答へると、巡警の許に連れて行かれた。ソ
 ーすると、衣服を脱せしめて身體検査を行つたが、別段怪しい品をも所持して居ないから、直ぐ許されて
 十分見物して来た。映畫館でアメリカ製の排日映畫を観覽したらば、日本兵士が上海あたりで、支那人を
 虐殺して居る所を、米人が双眼鏡で遠方から擬視して居るなどいふ古いもので有つたが、ソナ物が大衆
 に受ける所を見ると矢張排日氣分があるには相違ないと云ふ事であつた。夫を聞いて我等は支那街に踏み
 込まなくて善かつたと思つた。

細密に視察すればまだ見る所もあらうが、ソナ譯にも行かず、且我等の如き政治にも經濟にも無關係
 な者は一日も早く北平に赴いた方が善いから天津は是れで切上る事にした。

十月一日晴早起七時半旅館を辭して天津本願寺に赴き、一昨日以來の好遇を謝し、歸途又此の地を通過
 するを以て、身輕に成つて北平に赴かんと荷物を預け、唯スーツケース一個を携へて天津驛に至り、芙蓉
 館の番頭に見送られ、歸途は此の驛にて荷物を受取り得るやう依頼して、車中の人となり、北平に向ふ。
 車中の状況は天津に来る時と同様で記すべき事もないが、五十歳以上の老婆が、日本でならば十二三歳の
 少女が挿す様な赤い花簪を挿して居たのを始めて見たので、珍らしく感じたが、是れは純粹の滿洲人であ
 るそうで、爾後は折々見受けた。

外國の旅のさきにて思ふかな

我すめらぎをまもれ大神

國民のさかゆるきはみ何處にも

神のいますぞこゝろうれしき

此の腰折は、天津神社へ參詣の際の卒直なる告白であるが、是れより後は地名物名皆漢様なる爲、漢詩人
 には絶好なる材料で、詩囊も重くなることであらうが、和歌にはどうも收めにくくて、景色と言ひ、風俗
 と言ひ面白き材料は澤山あり、且つ相應の感想も折々浮ばぬでも無いが、何分三十一字には納まりがわ
 くて閉口の至りである。

北 平

北平は七百餘年前遼其の都城を築いて、南京析津府と稱した大都市であり、金・元相繼いで之を擴張し
 て、支那四百餘州の首府であつた。明は太祖・建文帝の間は南京に居たが、太宗永樂帝此の地に都して、
 北京と改名した。數百年間世界四分一の土地人民を控制し、世界に雄視したる土地で、人口二百萬を有し、
 其の紫禁城の如きは、規模の宏大なる、技工の優秀なる、夙に定評の有る所である。清朝亡びて復都は南
 に遷され、北平と舊名に復した。

十月一日正午十二時十分前、汽車は此の大都市の大玄關北平驛に着した。我等は多數乗客と共に正門口
 より出た。是は失敗であつて右方の出口よりすれば日本公使館や我等の投宿せんとする旅館にも近くて
 便利で有つたのである。驛を出づるや人力車、馬車、自動車等の車夫四方八方より群がり來り、乗車をし
 つこく勧める。我等は勿論地理も知らず、言語も通ぜず、聊か辟易の體で有つた。併し是位の事は出發の
 際より覺悟の前であるから、ウンと落付いて、ドノ車に乗らうかと考へ、最も支那的の馬車が善からうと、

之に乗り込んだ所、其の汚穢なること、其の進行の遅緩なること、進行中大きなベルを鳴らして如何にも奇怪に感ぜられ、我ながらをかしくもあり、又不安にも有つたが、道を聞きながらヤットの事で日本公使館に行着いた。然るに運もワルク是の日は日曜日で且日本人民團の運動會日である。當時日本人は在留者最も少く、漸く九百人位より無いとの事で、平日異人種の間在り、最も娛樂少く、運動會は民團の最も樂しき大なる催しで、日本人は貴賤も貧富も、老弱男女殆ど残らず運動場に集まり、公使館には一人も日本人は居らず、又門番も日本語を解しない支那人である。種々苦心の末鉛筆を執つて日華ホテルの所を聞き糺し、復是まで乗つて來た馬車に納まり、漸く同ホテルに到着してホット息をついた。投宿早々晝食を命じ、午後人車二臺を命じて市中否名所見物に出掛けた。車夫の一人は曾て日本に赴き、駐留八年東京、横濱、大阪等に奉公して居たが、最近歸國した者で、日本語を可なり達者に使ふ故、大いに便利を得た。是の日の觀光は天壇と北海公園である。

北海公園は皇城の西苑で有つて、紫禁城の西に接し、苑中には有名の太液池あり、之が分かれて上中下の三海となり、水を繞つて宮殿、樓閣、臺榭、門亭等參差として排列せられ、丘陵、沼地、北平城内には稀なる凹凸ある土地で、最高所には蠶壇と稱する堂宇があり、景山の高所と相如く程である。其の建築の宏壯配置の妙趣驚くばかりであるが、苑圃であるから、必ずしも支那正式の建築法に則つて、左右シンメトリーである譯でなく、巖窟中を通過する墜道あり、急階を登る高樓あり、佛殿あり、華表あり、池中の小嶼には亭榭あり、人工の極致を盡し、規模宏大にして變化に富み、先づ我等をして驚歎せしめた。帝政時代の驕奢の程も思ひやられる。

天壇は外城に在つて、皇帝親しく天を祭られる祭壇である。何人も知る如く支那に於ては天の明命を受けて、帝位に登るのである、祭天は最も重事である。中央最高所に祈年殿が屹立する、三成の圓壇の上に立つてある。塔の高さ八十尺、廣さは下成の直徑二十五尺と云ふことである。内部に十二の圓柱がある、十二月月に象つたので、其の又内に四天柱と呼ぶ圓柱がある。四季を標するのである。深藍の釉瓦陽光に映じ、威力人を壓するものがある。守衛の老巡警が不思議に我等を好遇し、親切に説明し呉れしも、遺憾ながら言語通ぜず唯姿勢態度に由つて察するばかりであつた。

天に在す神の天降りて地にいます

みかどに逢ふはこの壇の中

とは苦しい。祈年壇の外皇穹宇がある。結構形状殆ど同様であるが、餘程小形である。是等を一覽の後後に歸途に就き、歸宿すると北平本願寺輪番の光岡良雄師が待つて居られた。同本願寺は内地では本願寺派で我等は從來同師とは面識は無いが、天津の安田師より紹介状を貰つて來たので、宿の番頭に依頼して届させた所、同師は年齒も壯であり、活潑なる親切なる周旋家で、居留民中にも信用厚く、本日の運動會には幹事としてスタートを切る相圖をする役を勤めて居られたといふので、手紙を受け取つても直ぐ來られなかつたといふことである。曩にも一言したかと思ふが、天津には大谷派の天津本願寺のみ、北平には本願寺派の北平本願寺のみで、兩寺互に親密に交はり頗る好都合に行つて居る。夕食後光岡氏と翌日の日程等を協議し、師の歸去後九時頃就寝。

夫れに先立つて、徐かに大入道の一支那商人が風呂敷包を持參して入來し、覺束なき日本語で挨拶し、

包みを開き、翡翠、瑯玕、玉等を始め、種々の北平土産を購求せんことを勧める。我等は是等寶石類の鑑定も評價も出来なく、此地には偽物も多いと聞いて居るから、先づ購入は止めて置いたが、後に他地方の相場と比較して見ると此の地は廉價であることを感じた。且此商人は再度來たが遂に需めぬ我等に對して、我内地に於て、支那行商が勧める程執拗でなく、二度共存外簡單に歸去したから、却つて氣の毒に感じた。

二日晴六時半頃起床、朝食を終る頃光岡師來訪、乃ち人車を連れて日本公使館に到り、一等通譯官原田龍一氏に面會して、外務書記官江戸千太郎氏よりの紹介狀を手交して、來意を告げ、依頼する所あり、原田氏乃ち一等書記官中山詳一氏に引き合さる、依つて又來意を伸べ、便宜を與へられんことを請ふ。光岡師は中山、原田兩氏に謀り、案内役に公使館付警官石橋丑雄氏を命ぜられんこと、及び自動車一臺貸與の事を約せらる。石橋氏は一介の警官に過ぎざれども、最も研究心に富み、北平内外城は勿論、遠く西安邊まで旅行して實地踏査を行ひ、歴史地理等の書籍を耽讀し、剩つさへ支那語、英語に通じ、得難き博識家である。爾後北平内外の觀光に此好東道を得て、頗る便宜を得たのは深く感謝する所である。即ち辭して對支文化事業部に到る、目指して行つた杉村勇造氏は不在であり、河又正司氏は今來平の外務書記官柳澤健氏の出迎へに赴くとて出掛けられる所で、都合は宜しからざりしも、事務主任として來られし大槻敬藏氏の厚意に因り、文庫内を一巡して稀觀書を閲覽することを得た。宋元本・宋拓法帖、永樂大典(二冊)等何れも眼福を得たが、何分にも時間の餘裕を有せず、僅々一時間で辭去したのは殘懷の至りで有つた。永樂大典は唯一部の物が諸方に散在して纏まつた物は何處でも見るを得ないが、近來熱心に其行方を搜索して、大概其所在を知るを得るやうに成つたといふことである。

午後は旅宿に於て公使館の自動車の迎を受け、案内役石橋氏と同乗して大倉洋行に到つた、其處には國分青崖、長尾雨山、土屋竹雨、仁賀保香城等の詩伯が滿洲觀光の歸途此の洋行に止宿して居られるので、之れより詩伯等と同行して觀光した。

景山は、紫禁城の北方北海公園の東方に在る丘陵で有り、北平第一の高所で、其の頂上に殿堂があるが、此の地點からは北平内外城を一望の内に集める景勝の地で、又煤山と稱する。其の謂はれは明英宗の時に十月北胡の侵略を受けた。一體北平の地は十月頃は盛んに地方より薪炭を求めて冬籠の用意をするのである、然るに北胡に包圍せられ、燃料を購求することが出来ず、冬季を凌ぐに困難であるとして、住民の意氣が頗る阻喪したので、政府は一策を案じて、景山の下には多量の煤炭を蓄積してある、之は元來危急の場合に掘出して燃料に供する用意に貯へてあるのだから、若し籠城長きに亘らば、掘出さうといふ事を聲明した所、住民も忽ち勇氣百倍して、敵軍を撃退することが出来たといふので、爾來此の山を煤山と稱し、現今も猶同地の住民等の多くは煤炭貯蓄の事を信じて居る。苑圃の作方、樓閣臺榭の配置等は北海公園とは別趣が有つて感服せしむる次第である。

紫禁城は、即ち始めは元代の構築であるが、明を経て、清朝時代に多少南方に遷移したといふことである。其の結構の偉大なること、巧藝の妙趣あることは、伊東(忠太)工學博士が、

「偉なる哉支那建築、大いなる哉支那建築、千萬の言を列ねるとも到底その偉大を悉すことを得じ、五千年の太古に於て既に其發祥を見、周漢に起り唐に熟す、爾來漸次に低下して今日に至り、今や昔日の壯觀を失ふも、往昔の隋力はなほ儼として失はれず、世界の一角に異彩を放ちて歐米の建築を睥睨するに

似たり」

と絶讃して居られるので明かで、我等素人が贅辯を費す必要はあるまい。但し素人が見た第一印象は、先づ規模の偉大で壯重の觀を呈することである。第二は色彩に最も注意して、絢爛の美目を奪ふことである。第三に建築の區劃井然として、殿門宮舎各左右シンメトリーを爲し、眞型をなし、行草の建築法は少も用ゐてない、蓋し之は尊嚴を保つためであらう。初めに太和殿、保和殿等を觀る。

太和殿は城内中央壇上に屹立し、基壇は三成の白石で出来て居る、序に此處で言ふが、殿門、宮樓皆白石造の高壇の上に在る。北平は名の如く一望滿目平地で、附近に石材の在る土地柄では無い、何處より運び來たか、大理石、花崗石等の大石で積み上げられ、階段の如きは一枚で長さは三間以上もあり、幅は二間もあつて、全面上り龍下り龍の彫刻がある。此龍は天子の宮殿で無ければ用ゐられぬので、其兩側は昇降する階段に成つて居る。朝鮮あたりも石階段の構造は同一に成つて居るが、唯中央の鏡石(假りに斯く呼ぶ)は龍でなくて鳳凰である。太和殿の事を陳べるに當つて話が横へ外たが、同殿は紫禁城中の正殿で有つて、廣さ十一楹、深さ五楹、重層で屋根は四注である。壇の高さ三十尺、繞らすに白石の欄を以てし、殿の左右には紅牆があり、牆の終る所西を中右門東を中左門と云ひ、門の左右に復長廊下があり、之が折れて南に走り、西は右翼門東は左翼門に至つて盡きて居る。門の南西に弘義閣があり、東を體仁閣とする。共に重層四注の大建築である。是等の閣の南に復廊があり、太和門左右の閣廊に接続して居る。前に言ふことを忘れたが、宮殿には必ず同名の門が有る即ち太和門を入つて太和殿あり、保和門を通過して保和殿に達するといふ建築で、必ず其の形式は整然として揃つて居て例外は無い。而も宮殿、門樓、曲廊、迂牆等變

化の妙を極め、五彩の壁障畫屋瓦に相映じて、名狀すべからざる美觀に恍惚たらしめる。併し又日本人の趣味には餘りアクトク感ぜしめる所が無いでもない。其の圓柱の如きは皆朱塗で、美は美に相違ないが、我等には寧ろ東本願寺の白木の椶柱の方が清楚で品善く感ぜられ、支那の建築には雅趣は認められぬ様に感ぜられた。是に關して我等の感想に浮んだ所は支那建築は色彩に注意して、五彩絢爛たるものがあるのは、宮殿、儒廟、道觀、寺院等皆其の軌を一にして居る。然るに我日本に來ると、支那式を繼承すべき伽藍は却て白木造が多く、日本式であるべき神社にて却て丹堊を以て色彩を濃厚にした所が多い。近時漸く神社は瀟洒なる白木建の増加しつゝあるは當然の傾向かと感ぜられる。

太和殿に至る門は即ち太和門であるが、門と申しても、非常に立派な構造で、其の前面に小江があり、之には白石の五橋を架し、中央橋の前面に九楹重層の大建築物がある、之が即ち太和門である。門の左右に又門がある。東を昭徳門西を貞度門と呼ぶ、日本でも寺院に三門のあるのは此の制に準じたのであらうか。併し門の左右に各樓閣があるのは長家門にも當るやうでもある。圖解がなくては文句だけでは領解しにくい、左右の樓閣の南に東西廊あり、廊の中央東西門を開き、東を協和門西を熙和門と稱し、そして此太和門全體の門前廣潤なる庭面は甃を以て敷詰である。其の庭上に金銅の獅子、日圭、鶴、龜が据ゑてある。何れも皆精巧を極めた製作で、獅子は白大理石の臺上に坐して、宮殿を守衛して居る。日圭は嘉量と相對して丹墀の上に在つて、天子時を正し國を治める義を現はす、正朔の因つて出づる基である。鶴と龜とは共に青銅製で、相對立し天子の萬歳を祝する意とある。是に就て思ふに、現時支那の俗間では龜を忌避するといふことを聞いて居るが、是は恐らく後世起つた事であらう。

他の宮殿の説明は略するが、太和殿の事は今少し説明しやう。殿内四壁は皆甍を以て充填し、釉瓦を以て腰張りを爲し、貫、羽目、斗拱相重疊し、藻井まで床上凡そ五十尺の高さがあり、皆極彩色を施してある。殿内正中に皇帝の寶座がある。其の大きさ前後左右殆ど正方形で三十尺程づつある。寶座に登るには前面に三階があり、中階の幅一間餘ある。奥行は猶深いやうであり、左右階は幅は先づ半分位であらう、各七級である。背面にも亦三階がある。寶座の四周には勾欄があり、前面の階間及び座上前部に各二個の香爐が据えてある。座の上に椅子が据えてある、其の廣さ五尺餘、深さ三尺餘、椅子の前面に足臺がある。是等の寶座の四周や勾欄障、椅子等には複雑なる彫刻を施してある。殿内中央部の藻井は梁上に結構複雑なる科拱を装ひ、その上に格天井を張り、其の一間毎に丸龍を描寫してある。

保和殿は毎年除夕に皇帝が外蕃に宴を賜ふ宮殿で、一般に太和殿よりは規模が狭小であるが、絢爛の美は劣る所なく、矢張り四注即ち入母屋造りで、三成の基壇上に在る。保和門を出る頃は既に五時半頃で夕陽西に昏かんとする時刻であるから、此處で四詩伯と別れて歸途に就き、途中東安公司を見る、同所は北平第一のデパートで有つて、凡百の商品有らざるなく、雑踏殷賑名状すべからずである。我が三越や松坂屋等と比較しては何となく汚穢で、入り口に自轉車が數十臺駢べてあるのも異様であるが、これは來客のを預つたのである。少々の買ひ物をして歸宿して入浴食事等を済ますと杉村、河又氏等が來訪せられて、種々雑談を爲し、妻の希望として、支那書家の揮毫に際しての態度、姿勢、筆の持ち様を目撃し、出來得べくんば其の講義を聞かんこと、及び純粹支那家庭を視察すべく斡旋を依頼した、猶是の日不在中に柴田忠雄氏が來訪せられたといふことである、此の人は愚息と同窓で今年三月慶應義塾大學漢學科を卒業して、

今は北平に留學して居る人である。

三日陰、午前九時石橋東道に誘はれ、旅宿を出でて萬壽山に向ふ。途に岩佐忠哉氏我等を迎へて加はる、是れ公使館よりの指揮に因るのである。併し今日よりは國分氏等は別れて別に河又正司氏が案内せられることに成つたので、自由の行動が出來て心置なく觀光することが出來、御互に喜んだことである。城外に出づる頃より小雨が降り來つた、公使館より紹介狀を貰つて來たので、燕京大學を參觀した。此の大學は米國ミッションの後援で設立せられて居るので、何時も學生等は排日抗日の運動に熱中するといふことであるが、目下は鳴りを靜めて居る。設備は中々完備して居るやうである。米人の支那懐柔に努めることは實に至れり盡せりである。清華大學も亦米國教會の力で經營して居るといふことである。チキ近所に在るといふことであるが、設備は殆ど同一であるとのこと、雨は降る時は經つ、夫故此の方は省略した、猶此の近くに圓明園の遺跡があると云ふことである。同園は人も知るごとく、眞に天下の名苑で有つただけである、西曆千八百六十年清の咸豐十年英佛聯合軍が白河を浜つて北京を陥れ、圓明苑を破壊して悉皆掠奪したの事、憐れ今は唯礎石の存するのみであるから、規模の大は知るを得るが、景などは何等見る所なしとの事に之れも割愛して、一向萬壽山に急いだ。萬壽山とは北平西郊に在る。最初の經營は元時代にあり、皇室の離宮で有つて、經營の當時は定めて宏壯美麗で有つたらうが、今其の當時の物は唯一棟の樓閣が存するのみである。併し清朝末に女傑西太后が其の華壽祝賀記念として、海軍擴張費を割いて數寄を盡して修築したもので、費す所實に五千萬元といふことである。山高からねど實に風趣に富み、麓に昆明湖があり、水清冽にして湖中の小嶼に辨財天廟がある。我東京の上野山不忍池は恰も模型の様なものである。又湖中

には大理石の船型があるが、以て驕奢の一斑を窺知することを得る。山麓から頂上に至るまで建築の一群は實に壯麗と言はうか、美觀と稱せんか、其の牌樓は山の正面に立ち、昆明湖に臨む、蓋し近代に於ける牌樓建築中の尤なる物との評が當つて居やう。第一門の排雲門を登るあたりでは猶雨が降つて居たが、漸く天も霽れ、秋空が澄みわたると、眺望も又一入である。山上の樓閣眼に入る所近きは排雲殿遠きは佛香閣で、孰れも金碧燦爛目を驚かす底の建築であるが、就中佛香閣は群宮殿中の白眉で、我等素人は感歎するのみで、名狀することは出来ぬ。閣下の石壁は直立百尺と稱し、上に四層八角の閣を築ける所如何にも雄大である。此の上に於て辨當を認めた。清朝時代には曩に光緒帝は此の山の登り口に在る宮殿の一室に幽閉せられたこともあり、李鴻章が勅許を乞はずして、此の離宮に入つたといふので罰せられたといふが、是等の事を想ふと實に今昔の感に禁へぬものがある。佛香閣後の佛堂は衆香界と稱し、内部は甍を以て築いて佛像を安置してあるといふが、之れは見なかつた。又全部釉瓦を以て覆はれた塔や、萬壽山昆明湖之碑なる大石碑等皆雄偉壯麗である。

山水のながめの上にたくみさへ

そへて飾れるはなれ宮かな

と歎詠した。日清戦役當時清國水師提督丁汝昌定遠艦上薬を仰いで死せんとするに先だち、歎じて、若し太后にして萬壽山の修覆を爲さらずば今日の辱めは取らざりしものと言つたとの事である。成程初めの計劃では軍艦だけでも定遠鎮遠級の戦艦が六隻出来る筈で、それに相應した軍備擴張をする豫定であつたのが、萬壽山の修理で、海軍費の大削減を蒙つたのであるから、丁提督は愚痴をこぼしたであらう。併

し物は見やうで其の後張繼景氏はあの時悉皆海軍費に投じたならば、全部日本軍に撃滅せられたであらう、萬壽山を修理したので今に名所として残つて居ると申したといふことである。

暫時休息の後樓を下り、湖畔に出で、華舫を雇ひ、昆明湖を渡り、門を出で車を驅り、玉泉山に趣いた。玉泉山は萬壽山に隣れる丘陵で在つて、七重の大塔が遠方より望み得られ、山麓に裂帛湖がある。水亦清冽無比である。曾て支那國中の水質を檢查したと云ふことがあるが、此の水が第一に輕量で水質が優良で有つたそうである、此の清水を利用して、ラムネ・サイダー等を製する汽水廠といふ製造所がある。猶進んで龍王廟に到つた。水愈清く見ゆるので、我等は旅中決して生水を飲まぬといふ自誓禁を破つて冷水を一碗飲み干したが、實に甘露の味がした。

廟中には中央に龍王が結跏し、左右に雷神・電神・雨神・雲神等が侍立して居る、是等の諸神龍王の命に従つて各其の職掌を盡すのであるといふ。

白雲觀。歸途に就いて白雲觀に立寄つた。同所は道教の本山とも言ふべきで、市中第一の大觀である。到れば門前に多數の兵士が居る、觀中拜觀を請ふと目下此の建物は兵隊の宿所と成つて居るから、改めて來れと答ふ、種々掛け合ひ、道士に錢貨を與へしに、兵士と如何に妥協したか、中より陸軍の中尉で年の頃は二十五六歳で長身の士官が來て、名刺を出して案内して呉れた、其の肩書が餘り長いから御紹介申すが、名は沈秀峰と言ひ、肩書は中央陸軍軍官學校軍官訓練班畢業陸軍第十七軍軍部特務連中尉排長と云ふのである。是に由ると何學校の卒業など云ふことを名刺に書くものと見える。拜觀の前に兵士の事を一寸書いて見るが其の年齢は十六七歳位より三十餘歳まであり、體格も不揃であるが、愉快そうに戯れて居る

状は洵に無邪氣に見える。武器も不揃で小銃あり、青龍刀あり、中には武器を携帯せぬのも有つた。石橋氏が一兵に向つて青龍刀を貸せと言へば、言に應じて笑つて貸付した、予も之れを持つて振つて見たが可なり重い物であつた。夫から彼の沈中尉に導かれて観内を一覽した、時既に薄暮に近く、暗澹として明瞭には見えなかつたが、大建築でもあり、守護人も少いかも知らないが、何にせよ塵埃堆積の有様には驚いた、主たる観の前には陸橋の如き構造が有つて、其の下に道士の修行場がある、主道士は庭に出来り我等を見守つて居たが、頗る耳が遠いといふことだから、目禮したのみであるが、七十餘歳の穩和な老翁で有つた。老若多數の道士は階級の相違であらう、其の服装など區々で一定する所は無かつた。此の觀には道藏經を所藏して居ることは有名であるが、時刻の都合で閱覽を請はずして辭去した。

旅館に歸れば二通の招待状が來て居る、一通は今回來遊の外務書記官柳澤健氏からであり、同氏は文化事業部に居られるので、所管事務として視察に來られ、此の地から熱河に入り普く視察せられたといふこととで、其の視察談は既に讀賣新聞に出たといふことである。他の一通は中山書記官よりので、柳澤氏のは五日夜、中山氏のは六日夜で、國分氏等一行と共に一夕の會談を交ふる趣意の様で有つた、好意洵に謝すべきであるが、我等は五日朝退去の豫定であるから共に辭退した。

此の夜は光岡氏の招きに應じて、東安公司内の成吉斯干料理の饗應を受けた、豫ねて其名は聞いて居たが、味はうのは生れて始めてである。立ちながら片足を臺に掛けて、長い太い箸で口に運ぶ眞に蟹的なものであるけれども味は中々佳良である。十時過歸宿したれば杉村・河又氏等が、豫ねて依頼して置いた書家を同伴して來られたといふこと、又其の節の話に、支那家庭をも見せる都合を運ばれたといふことと有

つたが、遂に之は機會を得なかつた。御氣の毒に感じた、残り惜しくも感じた。

四日晴。朝九時旅宿を出で、中山公園に赴いた。是の日は陰曆八月十五日で、支那では中秋節と稱して、正月元日と並て年内の二大節であり、經濟上よりも從來の貸借等は一切清算する大切な日である。街頭は種々の飾り物等を設け、御祭氣分で中々股賑である。此の上に屋臺を設け囃子を入れて舞拵する様など我國の祭禮と酷似して居る。

中山公園は清朝時代の社稷壇である。今は公園と成つて居るけれども、本日は中秋節であるから一般民衆の入場は許されぬが、救貧の寄附者には特別入場を許可するといふこと故、高い入場料を拂つて入園した。中央には即ち社稷壇がある。高さ三尺位で三成の土壇である。五色の土を各其の方面から取寄せて築いたのである。即ち青土は東方、赤土は南方、白土は西方、黒土は北方より運び來り、中央の黄土は北京に近き地方より採取したのである。皇帝が此の壇上に登つて社稷を親祭するのである。他に種々樓閣等もあるが、大體に於て瀟洒として、紫禁城や萬壽山などの如く極彩色で濃厚な裝飾は少く、寧ろ日本庭園の如き觀がある。

併し社稷壇の背後に吾妻屋の如き一堂が有つて其の四面に孔子・子思・孟子・程子・朱子・岳飛・王陽明等の如き古聖賢の格言を聯として駢懸してある。其の文字は近代の名書家の揮毫に成り頗る立派な物である。道に支那式なりと感ぜしめられた。

中央の大閣中に珍奇の品の展覽がある。殊に珍しかつたのは種々の異形の時計が多數に有る、之れは歐米各國の大公使等が赴任の際皇帝に献上した物との事である。正午十二時に是等時辰儀が相次で時を報す

る有様は奇観である。又陳列品中に香妃の畫像がある、頗る麗人で有つて、身より常に馥郁たる芳香を放つたといふので香妃と稱せられる。傳説に據ると同妃は元と西域回々教國王の宮中に在つたものを康熙帝が其の美を聞き、國を滅し、王を殺して、妃を奪つて還られたが、妃は決して帝の意に従はず、帝之一室に幽し、爲に浴場を設けた。其の浴場は現存して居るが、實に堅牢宏壯な物で、構造は巧妙を極めて居る。之は廉南湖氏未亡人廉春野女史日本の説明で又誘引で有つた。且同女史は斡旋して香妃の像の寫眞を贈與して呉られた。後に石橋案内君は、彼の美人像は廉南湖氏等の鑑定に因つて定めた物であるが、果して然るや否や疑ひなき能はずと評して居た。忘れたが香妃は其の後遂に帝意に従はず自殺を遂げたといふことである。

次に紫禁城觀覽に赴いた。第一正面の樓門即ち午門に登る。此の門は今古宮博物院と稱して、舊宮殿内に有つた清帝室の什寶を主として陳列した物である。今三四ヶ月以前であると是等の全貌を見るを得たのであるが、現時は目星い物は既に南方に運び去つて、北方は屑が少々残されて居ると云ふことである。其の運搬費が五萬元懸つたといふから、其の量の多い事も想像せられるが、質も最も優良の寶物のみとの話である。併し南方に陳列場も無いから上海の倉庫に入れ、借款の抵當として佛國の管理に歸して居るとの話で有つた。扱後に残された物は數も少く、質も劣るとのことであるが我等には相應珍しい物も有つた、鉅鹿の發掘品は皆揃つて居た。其の外日本とは異つた物はある、併し東道石橋氏が珍しいとて銅鐸なりと指示せられたが、是は鐘であるまいか思つたが如何にや。

次に乾清宮を觀る。是の宮は皇帝が政を聞き、庶僚を引見し、外國使臣等に賜調の宮殿である。日本で申せば鳳凰間の如きものか。前面の装置は最も莊嚴を極め、帝位の重きを知らしむる爲の寶鼎四個を据え、日圭あり、嘉量あり、角道がある。角道とは同宮の前後を通ずる爲に作つた大理石の道である。石欄を具し高さ六尺餘、長さ百六十五尺、幅三十尺ありといふ。又此の宮殿の廣袤は間口九楹・奥行五楹・重層・四注で有つて、太和殿よりは狭小であるけれども、城内の主要宮殿である。中央に在る寶座は實に壯麗である。

坤寧宮、此の宮は其の廣袤全く乾清宮と同一で皇后の正寢である。此の他猶種々の宮殿を觀覽したが、鏡とか硯とかソナ物の陳列しある殿廷もあり、佛殿もあり、又文淵閣などは今は中は殆ど空虚である。是等及び后宫妃嬪の居殿等を巡覽したが今は一々述べるは止めて置かう。城門を出てから前清朝廷に仕へて、今猶生存して居る一官宦の家を訪問したが、不在で面會が出来なかつた。

雍和宮・孔子廟・十方普樂寺等を巡覽したことを略叙しよう。

雍和宮は清の第二世皇帝世宗雍正帝が皇太子で在られた時に長く住居せられた宮殿であるが、其の後之を喇嘛寺として寄捨せられたもので、其の本山である。曩明治三十三年頃であらうか、此の雍和宮の貫首普圖克圖喇嘛は我國を來訪し、余も會談した事があり、帝國教育會でも招請し、大谷派法主現如上人も東京で會談なされた事がある。其の喇嘛は最早故人と成られたやうに承はつた。斯く宮殿であるから輪奐の美と規模の廣大なことは流石に立派であるが洒掃行届かず、不清潔な事は白雲觀と伯仲の間である。

此の宮の主要建物即ち寺院ならば金堂とも云ふべきは萬佛樓といふ。三層樓であるが内部は一階で高さ七十五尺の大佛が安置してある。又此の宗では陰陽抱合の偶像を奉祀して居るのであるが、現時は世論に

願み幕を前面に張つて蔽つてある。時恰も夕の勤行の始まるに際したから、萬物樓に向つて左方の恰も對の屋の様なる堂内で執行せられる勤行を見た、衆僧其の座に就くには必ず三跪拜の禮をして後坐する、殊勝と感ぜられた。讀經の有様は内地の各宗の形式と變つた事も無い、又其の筈である。

僧侶は皆獨身で、境内の住房に棲住して居る。我等其の一方を訪問した、喜普明といふ人の住房である。同師は不在であつたが中に三人の弟子僧が居り、茶を汲んで愛相よく接待して呉れた。居室は狭小であるけれども、内佛あり比較的サツバリと洒掃して有つた。名刺に喜普明淨廬とあるも面白い。

孔子廟は白雲觀・雍和宮よりも規模が小である様に思はれた。併し中央の本廟は魏々たる大堂である、唯樓閣等建築物の数が少いので見劣りがする。本廟の中央に大成至聖文宣王の神主を祀り、其前方兩側に顔子・子思・孟子・周子・程子・朱子等の道統傳承の大儒の神主を祀つてある。別に修飾した装置もなく瀟洒として如何にも孔子廟らしいが、唯遺憾なことには塵埃の堆積甚だしく、塵臭鼻を穿つといふ形勢で、乞食的番人は老若二人のみ。併し門前には乞食群集し、我等の車を控えて哀みを乞ひ、進ましめざる有様で閉口した。最も尊嚴清肅なるべしと期待して居たのに、全く期待を裏切られて失望した。曲阜の孔子廟は未だ參拜の機を得ぬが、如何なる實況であらうか。抑支那人一體に孔教に對する考へは如何であらうか。

十方普樂寺は俗に臥佛寺と稱せられる。二十二尺といふ釋迦佛の大臥像が安置せられて居るからである。此の像は涅槃像とも異つて單に横臥の佛像が一體あるのみである。勿論他にも佛菩薩の像はあるが、皆單獨の佛像で臥佛とは何等の關係を有せぬのである。此の寺は今回の旅行中我等が參詣したる支那佛寺の唯一のものである。單に一個寺の例を以て、他を類推するのは危険であるが、此の寺は比較的綺麗に掃除し

てあり、堂内の莊嚴等は内地の眞言寺院に幾分似通つて居ないかと思はれた。境内に沙羅双樹と呼ばれる大木がある。是が眞の沙羅双樹であるか否かは知らないが、葉は木蓮に似て居る、記念に一葉取つて歸つたことである。

北平城壁。支那の萬里の長城は有名な物である、山海關を訪うて之れを一覽し度いと思つたが、種々都合で此の希望は叶へられぬ様に成つた。そこでモー日暮に近付いたが、北平の内城壁に登つた、内外城共に城壁があり、就中内城壁は高壯である。兩側は輒を以て築き上げ、其の高さ十間餘あるといふ、ソシテ上部の廣さは八間から十一間ある。即ち所々に階段が設けて有つて登り得られ、其の場所は特に幅員が廣い、斯くて一旦關門を閉鎖すれば萬夫不當の猛將勇士も如何ともする能はざる壘壁で有つたのである。夕景此の壁上で明皎々たる朗月を望む豫想で有つたが、生憎曇天で月明かならんと欲すれば雲之を蔽ふとも云ふべきか、東山にも斗牛の間にも月影を見ることは出来なかつた。我等の失望はさることながら、北平二百萬の市民が中秋無月は如何に本意なく感じたであらうか。支那ではコンナ事は少いといふことで、此頃は日本の勢力が支那にも延びて氣象や天候も日本的に成つたと言つて笑つて居る者が多い。後に聞けば日本では却て善い名月で有つたとの事である。

北平の見物は猶幾多の堂塔などを道畑等に見たが、夫等の記事は一切略する。併し猶見残した場所、見たいと思ふ所等澤山ある。又此の頃は深く進んで熱河の方へ赴く人が多く成つて來た。是も我等の望む所であるが、總てを斷念して、愈明朝は北平退去と決して、歸來其の準備をして寢に就いた。

支那を去るに際して、少し聞いた事や感じた事を書いて見やう。四日夕食後人車を連ねて、今回頗る厄

介に成りつゝある、光岡氏の住居なる北平本願寺を訪問して、禮意を述べた。同所は元來陸軍の所持で兵營か何かに成つて居た建物である、夫れを光瑞上人の力で貰ひ受けて別院にせられたもので、寺院としては餘り適當の格好をして居ないが、併し内地と遠ひ、又種々の事を世話する光岡氏には内地向き寺院が都合が善い譯ではあるまいから、北平本願寺は輪番に取つて却て適當して居るであらうかも知れぬ。

却説光岡氏の談話であるが、多年此の地に居住して、支那人を観察するに、其の心理は一向分らない。例へば駱駝の如しと云ふべきか、駱駝は何時も眼を据ゑて動かさず、其の歩行中眼球の動くといふことは頓と無いやうである。段のある坂を上るのでも下るのにも、格別注意して足許を見るといふ様子もなく、相變らず眼を据ゑて凹凸ある道を悠々と歩を運んで居る。一體其の目は何處を見て居るか分らぬが、兎も角間違ひもなく進んで行く、支那人の舉動や顔色も同様で、其の悠然たることは何時も同じやうで、何處を見てゐるか何を志してゐるか頓と分らない、ソウかと思ふと意外の事を演ずることもある。夫故僕は支那人は駱駝の如しと思つてゐるとの話、成る程我等暫時の觀察に由るも名言適評であると思ふ。かの天津で日支兵が衝突したり、其の支那街で排日映畫を興行したりして居るかと思へば、又白雲觀に居る番兵が我々に兵器を貸渡したりする。近頃蔣介石は親日抗日二匹の馬を御してるといふが、國民全般が無意識の間にそう成つてゐるのではあるまいか。兎も角我等日本人とは餘程違つた所がある。到底其の目付きや顔色では内心を讀みにくい。歐米人は我々日本人に對しても、喜怒哀樂を色に現はさないもので、心中が讀みにくいといふが、趣は違ふが支那人は夫以上心中は讀みにくい。人を見れば泥棒と思へといふ古諺の如くに油斷をせぬ事も必要であるが、併しそう彼等を惡觀するもよろしくない、洵に無邪氣な所もあり、可愛い點もある。

道徳宗教などの事は四五日の滞在、夫も市中や名所の見物で日夜を過ごして居て、判知する譯には參らぬから、無論大きな口は利けないが、孔子廟や寺觀の様子から見ると、今日では何れの徳教も宗教も衰頹してゐることは極度に達して居る。儒教などは古くて今日の時世に適せぬとなり、ソウかと云つて、所謂三民主義などは容易に一般に理解せられるものでなし、佛敎も亦權威を失ひ、喇嘛僧なども王室や政府の保護を失つて何れに向つて行くか、方向を見出すに苦しんで居る有様で、無論一世を指導する意氣はなく、眞に支那國民は舵を失つた船の如く、行く方も知らぬ有様と想はれる。併し漢人といふ人間は一般は兎も角時に大偉人を出す歴史を持つて居るから、何とか支那人に魂を入れる人物が出て來るであらうかと思はれる。

有閑人、と云へば、日本では有閑マダムなど、言つて、上流社會の別に働くを要せぬ人の事で、下層貧困者で閑暇の有るといふならば、それは失職者で憐むべき人々である。男女老弱悉適當の職を得るのは何時の世何處の世界でも困難であらうが、支那では中流以上の婦人は悉く有閑マダムである。社會に立つて仕事を仕ないのは勿論、家内に在つても奴婢を使用して、家事一切萬事は奴婢任せで何等自ら手を下す所は無い。日本人の家庭でも殆ど皆支那ボーイを使用して、主婦はノンキに遊び暮して居る、夫故彼等家庭では日本へ歸還したくないと稱して居る者ばかりである。雇用せられて居る階級の男女でも、矢張り支那ボーイを使驅して、コチラは吞氣でよろしいと濟まして居る。

今一つ違つた意味の有閑者がある。中流以下の彼の國人が頗る多數に街頭にウロ／＼ブラ／＼して居る。

何を見るときも爲すともなく、暮して居る、天津然り、北平然り、強ち失職者でも無い、夫は家の構造も暗く、又家族が多いので家内に暮す譯に行かず、野天で暮すのであるらしい。

蒼蠅は支那名物の一である。其の多きことは實に驚かざるを得ない。食物に眞黒にたかり居る様眞に無氣味でたまらぬ。到底我等が箸を着け得ない食物を、吹いて蠅を逐ひ散らして食する如きはまだ可い。高粱の粥中に煮込まれた蠅を取捨て食するのは平氣なもの。曰く食物美味なるを以て蒼蠅集まり來るなり毒なきを以て蒼蠅たかるなり、我々安心して食して可なり、蠅の集まり來らぬ如き食物は毒素の混じ居る徴なれば、ウツカリ食すべからずと稱して居るそうな、物は考へ様なり。

人力車は、我國の發明品であるが、今日では我國には頗る減少して、殆ど過去の遺品で有つて、街頭に見ること稀に成つた。然るに北平天津等に人力車の多い事は蠅と同じく驚くばかりで、我等を襲ひ來ることも亦似て居て、頗るウルサイもので、之を防ぐ方法は何か乗物に乗つて居るに限る。賃銀は廉で乗り心地は洵に宜ろしい、箱が低くて柄が長く、顛覆しても怪俄する心配は無いとの事、馬車も澤山あるが、進行頗る遅緩、内部不潔、刺つさへ大なるベルを鳴らして進む様は、迎も今の世界にコンナ物があるかゞ不思議と思はれる、一度の経験で懲々した。遠からず跡を絶つであらう。

其の他自動車は數少く、又有と聞いて居た所の轎輿と云ふ物は頓と見受けなかつた。何れにしても支那人等は街路を悠然緩歩して、馬車人車には勿論自動車にさへ、容易に道を譲らないのは困つたものである。街路家屋、街路の幅員は北平では従前廣いので、自動車流行の世と成つても、俄に市區改正の必要もない。毎戸皆立派なる看板を掲げて居る。シモタ屋でも門に聯を懸て居て、弊屋にも手跡の立派な聯を吊る

して居るのは目に着く、流石本家だけ有つて、書は感心にウマイ、家の構造は表面大通にのみ向つて、横町や小路は家の側面で全部土壁であり、街燈も無いので夜間など通行するのは、餘程無氣味に感ぜられる。先づは文明に後れた形である。建築で最も下等なるは泥土の箱の如き小屋で、塘沽の家屋は皆夫であるが、木造家屋には丹朱青緑等の色彩を濃厚に用ゐて、五彩輝き絢爛目を奪ふ趣は、大建築は皆同じで宮殿も儒廟も道觀も佛寺も差違は見えないやうである。其の中黄瓦は帝王の特權で他に使用を許されない。が併し日本人の眼にはコツテリ過ぎてアクドイ觀があるやうである。我國でも法隆寺などは彼の建築に倣つて彩色が濃厚であり、卒塔婆は何處でも塗り立てるが、後世の建築は寺院は生地であるのが多い。其の風は却て神社に移つて、祇園・春日・稻荷・八幡宮等に彩色の建築の多いのは神佛習合から來たのかとも思はれるが、又直ちに建築様式として支那風が移つたのか何れで有らう。

道路、支那の道路は實にヒドイ全く道でない、田島の中或は土腐の中をのたくるのだと聞いて居た。地方へ行くとソナ場所も随分ある様だが、北平の街路は勿論ソナ事は無く、又天壇とか萬壽山とか我等の行つた郊外は中々道路も好いが、聞けば觀光の客を誘引するために、清朝時代よりも寧ろ道路は好く成つたと申すことである。利にさとい支那人の事であるからさもあらんと肯かれた。

大 連

五日期八時十五分、新識の諸君數人に送られて北平驛を出發した。此の行、山海關の方を廻つて萬里長城や、其の邊の新戰場を見物せんかと考へたが、猶奉山線が危険なりとの噂もあり、又東京のツーリスト、

ビュローで専ら之を憂慮して、山海關通過の周遊切符を賣らず、天津から大連へ航海の切符を買取つた事でもあるから、其の事に極めた。天津驛に至ると安田輪番及び芙蓉館の番頭に迎へられ、預けて置いた荷物を受け取り、安田師からは名物天津栗を貰つて、塘沽に至り、天津丸に乗り込んだ、此の船は北嶺丸と同じく二千六百トンとの事であるが、専ら旅客用として製造したので、船室は北嶺丸とは非常な相違で、始めて一等船客の氣分を味はつた。

午後一時解纜して大連に向つた。航海は何時も不運で風波荒く、船の動搖はヒドカツた。塘沽大連間は普通二十時間の航海で、六日午前八時に大連着の筈であるが、六時間後れて、午後二時まで掛つたのを見ても荒模様が想像せられやう。併し二十六時間の航海兩人共別に船暈も感ぜず、大連埠頭に上陸した。此處は水清く、船は岸壁に横着になる。家屋は概ね宏莊な洋館である、忌な税關もない、總ての風景が塘沽とは雲泥の相違である。

かつて聞く文殊のさとは此處なりや

來て見る今日ぞうれしかりける

是は一步足を滿洲に履み込んだ時の感じを其の儘腰折れにしたのだが、滿洲と云ふ名稱は寂調音所問經に

東方去_レ此過_二萬佛土_一。有_二世界_一曰_二寶住_一。佛號_二寶相如來應供正遍知_一。今現在。文殊師利爲_二彼諸菩薩摩訶薩_一。如應說法。

とある、華嚴經菩薩住處品にも同じやうな事が説いてあり、東方に文殊菩薩が現住しておいでなさる、即ち清涼山から東北にかけて、文殊菩薩及びその眷屬の住所として、滿洲は即ち其地に當つて居る。文殊詳

には、文殊師利又は曼殊師利 *Manjusri* である。此の名稱から滿洲とか滿洲里などの名が出て來たと云ふ人がある。其の説の當否は知らないが、北支那の泥海から來て見ると、餘り心が清々したのと、コンナ説を思ひ出し、如何にも文殊の淨土らしいと思つて、コンナ詰らぬものをものしたのである。

上陸すると直ちに若狹町なる大谷派本願寺に至り、先づ荷物を下ろして同所に厄介となる。同寺は市中最も高敞の地を占め、而も殆ど市の中央に位し交通至便の地に在る、輪番新田神量師は在勤既に二十餘年の久しきに亘り、初め赴任せられた當時は、大連其の物も今の殷盛に比すべくも無かつたが、別院は猶一層貧弱で、殆ど見る蔭もないあはれさであるから、同師は自ら役僧の働きをして、同寺の基礎を築き上げ、十數年前より大堂建立に着手し、二十間四面程の二階建鐵筋コンクリートの本堂は殆ど竣工し、一階は靴の儘で椅子に倚るべく、二階は疊敷で安座する様に出來、各階各二千人を收容し得る堂々たるものである。程近く本願寺派別院があり、其處には大谷光瑞上人が常在して、自ら指揮棒を振らるゝのに對抗して居る。先づは偉觀と評してよろしからう。先年井上圓了博士が此の地に巡教し、日は忘れたが午後到着して其の夜直ちに本願寺派別院で催さるゝ講演會の演壇に立つて、講演中發病し、遂に復び起つ能はず、當地で逝去せられた、新田師は博士創設の哲學館（今の東洋大學）の出身であるから、博士の歡迎から、諸所講演場の準備等萬端斡旋せられ、又博士の發病で親切の程を盡されたのであり、其の後も師恩報謝の營みとして本願寺境内高燥の地に立派な墓を設けて在る。博士も此の高所に在つて、日に榮え行く大連市街を瞰下して居るのは慙満足であらう。

此の夕（六日）新田師に伴なはれて、晚餐を大和ホテルに取る。食後市中を一覽した、街衢は四通八達で、

街路も幅廣く、文明の設備は一として備はらざるなく、且何人とも日本語で對話が出来るのがタマラナク嬉しい。内地然も東京に居る心地がして、全く身の外國に在るのを忘れた。唯美觀を損する様な露西亞馬車が市中を右往左往して居るのは不體裁で有つた。されど是も當地では一種の交通機關で有つて見れば、其の不體裁も致し方は無い。

南滿鐵道株式會社は此の地に君臨する王者である。萬般の設備は皆滿鐵の手に成つて居る。金融も教育も工業も商業も總て滿鐵を離れては成り立たない。滿洲の滿鐵か滿鐵の滿洲か分らぬ狀勢である。併し此の王國でも張學良政權が隆々たりし頃は、日に月に其の勢威を縮められて光も薄らぎ、經營も困難を感じるに至り、社員等も皆何時歸國せねばならぬか知れぬと、密に其の準備と言へば大袈裟かも知れぬが、多少心懸けて居たもので有つたそうなる。

今や滿洲國の獨立と共に、面目を一新し、大連の繁榮は昔日に倍加し、王國は洋々たる前途を擁して、最も得意の體とある。

七日。午前九時新田師夫妻に伴なはれて寺を出で、滿鐵會社に抵り、總裁林伯に敬意を表した、蓋し伯は會識の間柄で有つて、東京出發前にも面會して、旅行に便宜を與へられんことを請うた因縁があるからである。新田師も丁寧に總裁に挨拶を申し述べられ、對話暫時にて辭去した。次に滿鐵圖書館を訪うた。館長柿沼介氏は會識でもあるし、新田師も知合であるので歓迎せられたが、餘り時間が無いので、唯館内を一巡觀覽した。聞きしに違はず、設備は完全であり、藏書は多く、珍書も澤山ある。ユツクリ閱覽して居る譯にも行かず、早々辭去して、自動車を星ヶ浦に飛ばし、大和ホテルで晝餐を取つた。

星ヶ浦の絶景は滿洲第一で、其の名は初代滿鐵總裁後藤新平伯の命ぜられし所で、大和ホテルは其の形勝の位置を占めて居る。庭前清波激澗岸を打つ狀は、對岸山島・塘沽方面の濁浪萬頃の狀と對映して、實に宵壤の差とは此の事である、景は美し名前は好し、歌を詠むは此處だと思つても、頓と出て來ぬ、情なく自烈たく思へば思ふ程猶出て來ぬ。

秋景色見れどもあかず星ヶ浦

家づとにせむすべぞほしかる

望み見る星ヶ浦曲に思ふかな

昇る朝日やてる月の夜

ドウも不満足であるが先づコンナ事で自ら諦めて措く。我等は此の絶景を見てコンナに喜ぶが、黃天黃土を常に眺むる支那人の感想は如何であらう。星ヶ浦は實に日本の絶景である、此の景勝は日本に屬して始めて其の所を得たのである。滿鐵總裁の舍宅は大和ホテルの坤方に巍然と聳へ、此の勝景を瞰下して居る。

唐土の海にはあらず星ヶ浦

よく日本のさまにかなへり

晝餐終りて歸途に就き、市端の露天市場を見る。俗に泥棒市場と稱する所で、それは如何なる品も無い物は無い。日本のデパートなども近頃は殆んどない物はないと云ふが、夫でも古物は無い、此の泥棒市場は古物が大部分で九十パーセント以上ある、新物は少ない。實際南京や上海あたりの支那都市では名の如

く、贖品が陳列せられて在るとの事で、頗る廉價の品があるそうだが、大連で日本警察が頗る能く行届いて、贖品などはないので、途方もない掘出し物は無いとの話である。けれどもあらゆる物品を所狭く足の履み所も無いやうに列べ立てた有様は、全然支那都市の泥棒市場と同一で、古下駄、割れ鍋、古金庫、破れ足袋、出来合洋服、赤毛布、珠數も木魚も半鐘も罎口も、野菜も果物も魚も牛肉も雜然陳列せられたる状態は全く奇觀である。ソーカと言つて可なり高價な贅澤品もあるので、先づは大デパートと云つて宜しからう。

次に市中を漫歩して二三の買物を爲し、歸寺後は奥地へ出立の爲に持物の整理をした。

旅 順

八日晴朝荷物は大連別院に預け置き、新田師御夫婦に送られ、バスに打ち乗り旅順見物に出掛けた。新旅順に到着すると、舊友津田元徳及び東本願寺在勤の山崎哲兩君が出迎へて呉れました。此の日丁度日曜日であるために、見物人が頗る多く、教育家團體なども有つて、乗り物が甚だ拂底で、機敏に行動することが出来ず、困つたが、漸くバスに乗ることを得て、旅順博物館に到つた。津田君は今年三月まで同館の館長を勤めて居た人であるから、館中隈なく案内をして貰つて我々には頗る好都合で有つた。同館は滿洲出土品は多く蒐集し、特に同港老鐵山邊の發掘品は珍品も多く、館前に大なる四室續きの石櫛が有つて、日本内地のとは構造も異なり珍しく感じた。蒐集品には陶磁器は結構な品が多いやうで有つた。一覽後同館で辨當を喫し後刻津田邸訪問を約して同氏と袂を別ち、自動車を備ひ、東鷄冠山、二〇三高地等の戦跡

を普く巡覽し、同地の青年團の説明を聴取した。同地に戦跡觀光の客を誘致せんがために、青年團にて無料にて親切丁寧に説明して呉られるのであるが、当日は觀覽者多き爲に、同會員も多忙を極めて居た。ソナ事で豫定時刻を殆ど二時間も後れて、羅振玉大人の邸宅訪問が出来なかつた事は頗る残念に感じたが、止むを得ず割愛して津田氏の邸を訪問して、晚餐の饗應を受けた。同地は田畝も開け、且同氏長男は農學を修めて、自ら農園を經營して居られるとの事で、野菜も美味で殊に苹果などは結構の様に感じた。六時頃發の汽車に乗じて、大連に歸り、大連驛にて暫時待つ間に豫て御依頼申したので、新田輪番は家族及び雇人等數人で我等の荷物を携へて驛に至り、見送つて下された。新田師、津田氏共特に懇切に世話して貰つたことを感謝する所である。八時新京行き列車に乗じて撫順に向つた。

旅順は關東廳の所在地であるが、今は所謂三位一體とやらで、關東長官は滿洲軍司令官が兼任して、新京に駐在せらるゝから、旅順は政治軍事の中樞から遠く離れて、洵に靜寂な土地で、氣候も溫暖で、食物は魚類菜果共に美味で、海水は清く、港口は狭く殆ど庭前の池の觀があるが夫でも此處が日清日露の大戦場で、特に日露役に於ては、海陸共に我が忠勇なる將兵が勇奮國に盡した處で、あの狭い港口を閉塞せんが爲に廣瀬中佐や杉野兵曹長が死んだも此處、有馬、大角兩大將等らが閉塞船を沈め身を以て遁れたのも此處、又陸には二〇三高地など見た時は、乃木勝典保典氏を初め戦死者を思ひ出したり、又水師營の乃木ステツセル兩將軍會見所には昔ながらの家屋棗樹などを見て感慨無量のものがある。實に懐しみのある場所である。此の勝地に靜かに老後を送る津田氏を羨ましく思つた。

九日晴、未明渾河驛に於て、汽車を乗り換て、約二時間で撫順驛に到着した。驛には義弟平石榮一郎が出迎へて呉れました。同人は滿鐵會社の技師で、龍鳳坑採炭所の社宅に居るので、驛から電車で一時間程掛つて同氏宅に至り、一先づ落着いたが入浴して午食を済すと同氏及び家族等と打ち連て、共に大野義雄氏に導かれて、先づ有名なる露天堀の石炭坑見物を爲した。成る程聞く如く廣大な物で、礦區の廣いこと、礦層の厚い事は全く驚の外ないのである。次にシエールオイル製造所に至つた、同所は人も知る如く、石炭を掘るに炭の外層にある頁岩、これは從來無用の廢物として廢棄し、其の手間料を要し、又放棄場を要し厄介視して居た物であるが、研究の結果此の廢物より油を搾取し得ることを發見した、此の油は石油で有つて種々の用に供せられるが、就中海軍省では戰艦運轉の用に供する、國防上最も必要の品なりと喜んで居る。勿論我が國防に對しては、全部之に依ることは出来ないが、大いに助かることは慶賀すべき至りである。此の製造所は恐らく世界でも類例稀な物であらう。併し製造に際して惡臭を放ち、油がにじんで、臭氣と汚穢は甚だしい、此の中に居て日夜事業に執掌する人に對しては感謝せねばならぬ。

奉天

十日晴、朝八時二十分平石氏と共に、龍鳳停留所より、電車で撫順驛に向つた。此の電車が上と下と二種ある、我が京濱間の如く同一列車に二等と三等と階級あるといふではなく、上等車と下等車と別々に時

を異にして運轉するのである。下等車は何時も滿支人で滿員の有様で、腰掛場所も少く、且臭氣鼻を衝く、全く文字通の事實で、佇立してヒドク動揺して、又蠅も居るし、日本人は餘程急いで、次の上車を待つ餘悠なき者の外は、下等車に乗る者はない。我々も時間の都合で一度下等車に乗つたが全く閉口した。支那人達は富者でも下等車に乗るのが多い、否殆んど皆下等車である。茲に支那人の強さが在る。殆ど動物と同一で、如何なる勞役にも驅使にも忍耐することは驚くべきものである。九時二十分撫順驛を發し、奏天驛に下車するや直に總領事館を訪問して總領事に面會し萬事便宜を與へられんことを依頼した、總領事は親切に案内役として外務書記生林迺恭及び自動車を貸て呉られた。乃ち親戚なる關東軍野戰兵器廠奉天造兵所服務の砲兵少佐沼田謙氏に電話にて着奉を報じたので、かねて我等を待ち受けて居た同少佐は自動車を遣はして迎へられたので、同造兵所に至り、辨當終り、一同造兵所を案内せられて一覽した。同工廠は會て張學良の使用せし所で頗る廣大なる規模で、兵器一切を製造する用に供し、従前は上級技術は殆ど全部英米兩國人で、下級職工及び勞働者は支那人であり、男女各國人の總計は二萬餘人に上つたといふことである。現時技師技手は勿論日本人で、下級職工及勞働の男女は張學良時代より繼續して、服務せしむる滿洲人である。されど人數總計は四千人ばかりで、張學良時代に比して約五分の一に過ぎないが、それで事業は全く同様の製作量を擧げて居るといふ事である。雇外國人のサボツて居る一端が判知する譯である。我等は最初眞鍮板を小銃彈に製する作業を見たが、皆若い滿洲婦人が従事して居る。之は最も見て面白い作業で、其の形状と云ひ、重量と云ひ、頗る精密なもので、苟も粗雑な事は許されない。眞鍮板を切る、形を造る等皆鉛細工の如く意の儘になる所、眞に感心すべきである。其の他各種の製作を巡覽したが、

其間林書記生は中々突込んだ質問を試みた。頭も善いやうであるが、あれが唯好奇心や知識欲だけの質問で有らうかと思はれた位である。

次に沼田少佐に紹介せられて、關東守備隊司令部に到り、契丹文の契丹道宗皇帝の碑を見せて貰つた、大場大尉が丁寧に案内して呉れた、契丹文字は人も知る漢文字に摸して造つたもので、全然同劃の文字も澤山あるが、其の發音も意味も未だ判知らない。大尉の話には先日鳥居博士が来て腰掛けて半日碑と睨めつゝ居られたが、何も効果を奏しなかつたとの事、同所は元湯玉麟の邸宅で最も宏壯華麗なる物で、張學良の邸宅よりも寧ろ豪華である。道宗碑は元來他地方に在つたのを佛蘭西の東洋研究の學會が所在地を擬定して、湯玉麟に發掘方を依頼したので、玉麟は發掘した所意外に珍奇な面白い物故、早速自邸に運搬して隠匿して、發掘して見たが、件の碑は無しと答へたものと云ふ。夫で今は日本軍の手に保管せられるのである。

一體湯玉麟といふ男は洵に心情野卑で、慾ばかり深く、コンナ宏壯豪華な邸宅を構へて居りながら、猶満足せず、百萬圓を投じて、一層立派な邸宅の新築に取りかかり、獨逸人に請負はしめ、既に建築も一通り出来上つて、七十萬圓程懸け、今から内部の裝飾に着手するといふ間に、所謂九・一八事件が突發して、ホウ／＼の體で逃げ出し、本宅も取られ新宅の方は其の儘放置してある。今回滿洲國に大博物館創設の議起り、場所は新京よりも寧ろ奉天の方が博物館には適して居るであらう、就ては湯玉麟の新邸の不用に歸してゐるのが最適であるといふ決した。コンナ事に流用するには、中の裝飾が住宅として出来上つて居ないのは却つて好都合であらう。此の博物館には羅振玉大人が數十年間苦心して蒐集せられた多數珍器、稀

觀書、記録類幾十萬圓若しくは數百萬圓とも分らぬ珍寶を悉皆寄附せられる、それが基本と成つて、滿洲國の貴重品も種々集めるといふ事、契丹文字の碑、及び同碑と共に發掘せられた漢文碑、巨鐘等も館内を飾るであらう。此の博物館創設協議の爲に近日日本からも服部、内藤、濱田、羽田の諸博士及び帝室博物館の溝口美術部長等が來滿して、羅振玉其他の要人と協議せられるといふので、支那時報社長の水野梅曉氏は、先發來滿せられた。願はくば好都合に進捗せんことをと祈る次第である。

さて横道へ這入つた序に今少し湯玉麟に就て聞いた事を記すならば、彼は下劣といふので、滿漢人の間にも好もしくない批評のあるのは、奉天市内にも沒收同様にして得た多大の地所に家屋を新築して貸家を澤山所持し其の貸し代を取り上げることは莫大な金額に上ると申すこと。又熱河地方は樹木は伐採せられて、滿目綠樹を見ざる有様であるに、承德離宮のみは天下の名苑として、北京の圓明苑と相並ぶと稱せられ、松樹など幾抱へもある大木が亭々と聳えて居たといふのに湯が之を占領してからは、大概伐採して阿片製造所にして、アトラ名苑を惜し氣もなく荒して仕舞つた、且同地方では喇嘛の大寺院をヒドイ目に逢はし少しも風流氣も無ければ信仰心もなく、唯慾一方で滿支兩國に對しても、文字通りに首鼠兩端を懐き、孰れに對しても誠意がなく、勢に従つた向背を爲し、奉天にある邸宅や土地家屋の所有權を得やうと努めて居る。日滿兩國に於ても、彼と縁を絶つべく斷然邸宅を沒收して、博物館に爲すことに決し、是で最早湯もコチラへは來ないだらうと喜んで居る。扱支那側に於てもドウヤラ鼻摘みの鹽梅である。

午後は奉天名所の隨一たる北陵見物に出掛けた。陵は康熙帝以前即ち清室發祥の地なるを以て、四代の帝陵は此の北陵と東陵とである。東陵の近邊は猶匪賊の出沒するありとの事で見合せたが、此の陵は安全

である。陵前面道路の兩側には多數石造の獸類が併列してある、皆名作にして美術家の喜ぶ所である。又日本内地の如き老松樹が多數にある。陵は小丘上に宮殿を南面に築造した物で、所謂四神相應の地相を具備して居る。關内に進出以前と雖も既に全く支那文明の支配する所で、建築様式は紫禁城の小規模な物である。我等は明の十三陵も、清の東西陵も見ざれば比較するを得ぬけれども、蓋し相似たる物であらう。此處は記念として素人寫眞を五六枚撮影して來たが、不出來なのが多かつた。

次に北郊外の喇嘛寺に詣つた。支那道路の劣悪さ加減は今日初めて満喫した。全然道路と名づくべきものは無く、唯畑地の中を方位に由りて縦横にのたくるのである。日本の自動車ならば到底跋涉を肯ぜぬであらうが、ソコハ支那に馴れた滿洲國自動車厭な顔もせずして畑中の凹凸極まり、一つ間違へば水溜りの中に轉覆せんとするをまかはず進む、中に乗つて居る我々が、投げ出されソウで困つた。切に總領事館の運轉手君に謝する次第である。

喇嘛寺に到着して見ると、既に日は西山に春くといふか、堂内は暗澹として、僅かに燭火を以て辨識するのであるが、晝猶暗き堂内であるから、明瞭には拜し得なかつた。陰陽抱合の像は布帛を排して顯はして呉れた。此像に就ては立派な理論もあり、説明も出來、決して淫猥な物では無いと知つては居るが、併し手を合せて拜禮する氣には成れなかつた。時刻も後れるから、ソコ／＼で辭して、總領事館前にて林書記生と袂を別ち、大和ホテルに至り夕食を取り、撫順の平石家に歸つたのは丁度十時であつた。

十一日晴、昨日と同じく九時二十分撫順驛發、十時半奉天驛に着した。沼田少佐が出迎へて下さいまして、先づ當地第一の吉順百貨店に抵り、聊かの買ひ物をして一巡店中を見廻つた。第一と申しても、三越

や松坂屋などは餘程小さく商品も大した高價の物は見受けなな様であつた。賣品は日本製品が多いやうであるが、天津などよりは支那メイト見えた。次に國立博物館を一覽した、今日は是非共新京まで行く豫定故に丁寧に閱覽する時間を有せず、従つて是はと目に留まる珍しき品物も無かつた。更に國立圖書館を一覽に赴き、走りながら館内を一覽した、併し自分も曾て文庫事業には多少經驗を有すること連、博物館よりは幾分判知りが善い。此の建物は張學良の舊住宅で、今は文選閣と稱するが、湯玉麟の舊宅よりは多少質素かと思はれるには驚いた。彼は又湯玉麟程に品性下劣で無いさうで、若いながら凡物で無いやうに思はれた。此の館の司書主幹金九經といふは元來鮮人で有つて、曾て大谷派本願寺から援助せられて、大谷大學を優等で卒業した秀才である。特に語學の天才で日支英語を巧に説話する、朝鮮語は固より母國語である、特に日本語に精通せることは方言を聞き分けることは普通の日本人が叶はぬといふことである。惜しい事には此の人ともユツクリ話をする餘裕を得なかつた。斯く數ヶ國の語に通じ、頭腦も明晰で、而も勤勉であるから、館内でも非常に重寶がられてるやうであるから、大谷派の駐在布教使など同氏などは相提携して宗門の爲に盡力せられんことを望む次第である。此の館に最も有名なる圖書は四庫全書が全部完備して所藏せられるといふ事である。併し見本に出してあるより外見る暇が無いので、全部揃つてる効能は僕に對しては無かつたが、多人數其の取扱に掛つて居るから、時を得て如何なる書を見たいと望めば二階三階の高閣に束ねてあるのを見せて呉れる順序は出來て居る所が効果があるのだ。

次に滿鐵の圖書館に至つた。此の館長衛藤利夫氏は豫て面識もあり、司書の植野武雄氏は、妻と同姓で維新前には紀州熊野の鯨方で、藩主より特許を得て居た等で、妻の生家とは幾らか關係があるので、大變

懐かしがり、話に身が入つたのと、此處で製作せられた宋葉本の寫眞にした見本用紙？を貰つたりして時を取つた、沼田氏宅にて午餐を饗せられ、直ちに送られて驛に向つた。此の地は古き滿洲の首都であるだけに見るべき所は猶澤山あるけれども割愛したのである。

午後二時四十三分奉天發列車鳩に乗じて、新京に向つた。車中水野梅曉氏と邂逅した、氏は久しく滿支の間に在住し、種々の事業を爲し、ツイ先般も熱河地方の喇嘛寺で、滿文の一切經を發見したとて、新聞紙上に歌はれた人であるが、此の人が既述の如く、奉天に博物館創設の事業計劃の爲に渡滿せられたのと偶然出逢つたのである。同氏からは豫て東京に於て滿洲國名士即ち國務總理鄭孝胥大人、監察院長羅振玉大人等に面會すべく、紹介の名刺を貰つて來たのであるに、今此の同一列車で入京するのは頗る豫想外の好都合と喜んで次第である。

午後七時三十五分列車は新京驛に滑り込んだ。驛頭には羅大人も水野氏等の出迎ひに來て居られ、又文部總務司長西山政猪氏等も來て居られる。水野氏の紹介で羅大人にも握手し、又西山司長にも挨拶し、且北平で世話に成つた杉村勇造氏にも出逢ふことが出來た。夫から我等は親戚の外交部政務司長神吉正一氏に迎へられて、同氏の家に到つた。新京は元來田舎の小都會で有つたのが、滿洲國の首都と成つてからは、急に多數の人が入り込むので家が拂底で、旅館も亦需要に應ずること能はず、旅客は餘程以前から約束して置かねば宿所を得られない有様であるのに、我等は親戚の家に宿泊することが出來たは頗る好都合で有つた。

神吉氏宅に落ち着いてから、明日以後の日程を話し合つて就寢した。

新 京

十二日晴、朝神吉氏と同乗して外交部に到つた。外交部とは云ふものまだ廳舎もない、外交部長謝介石氏の官舎即ち謝公館で事務を執つて居るのである。當時謝部長は他に出張中であるとかで、面晤は出來ないので、日本領事館に至り、敬意を表した、副領事佐々木高義氏が出て接せられた。夫れから大使館を訪ひ、林出事務官が應接して呉れた。同氏は圓滿なる好紳士で、紅卍字會の熱心なる會員で、同會の爲に盡力せられて居る色々話が有つた。日本人で猶他にも數人同會々員があるといふ事であるが、就中大本教の出口王仁三郎氏も同會員として、林出氏と共に資格も善くて盡力するといふことで有つた。林出氏の話は上手で熱心で宗教方面などに知識も深く、滿蒙の間には駐在も長く、談話は有益で愉快にも感ぜられた。一旦神吉氏宅に歸り午餐を終つてから、午後は曙町なる大谷派本願寺別院を訪うた。撫順や奉天では布教所を訪問して、單に刺を通じて敬意を表したのみで有つたが、此の地では大いに世話に成つた。

是の日國務總理鄭孝胥大人に面會せんとして、水野梅曉、神吉正一氏の斡旋で、午後二時四十分より會見の約を爲し、一旦外交部に至つて通譯と共に總理邸を訪うた。總理は快よく我等を出迎へて、談話が始まると、恰も水野、杉村兩氏が來訪して同席し、我等の爲に通譯の勞を取つて呉れられて、頗る好都合で有つた。鄭大人は有名な學者であるから、我々は文藝學術の談話を交換せんかと考へて居た。然るに面會早々總理は熱心に政治談をせられる。我等も釣込まれて、ツイ不得意な政治經濟等の話をするに成つた。其談に前政權は種々秕政も有つた中に、紙幣を濫發して貨幣に統制が無く、日々貨幣價值が變更して、

何等標準價值が無い爲に、士民就中商賈等の苦痛が甚大で有つたから、滿洲國政府は王道政治の第一着手として、貨幣の統一を謀つた所、先づ今日では其の目的を達して、大いに人民に悦ばれて居るといふことである。そこで我等は従前は税則など一律せず、租税行政が紊れて居たとの風評を耳にした事があるが、其の方は如何なる様子かと尋ねたら、如何にも租税の方も統一を缺いて居た嫌が有つたが、此の方は中々一時に統一する運びには行かないで、國民の最も苦痛とする所の鹽税の整理を第一に着手して居る、此の方はモ一成功することゝ、信じて居る。問ふ民族の融和は困難なるものと思はれる、滿洲國は種々の民族の雜居であるから、定めて種々の困難も有らう。先づ第一に官吏が滿日漢等の民族雜様で、統御に困難は無いか。答ふ、宇佐美總務廳顧問、遠藤總務廳長、田邊總長三巨頭が心を協せて、萬事の締括りをして呉れるから、大いに安心して可なりとの事で有つた。

是より種々雜談あり、此の時徳永博士の率ゐる滿洲視察團の一部が來邸して、禮を述べるといふことで有つたから、辭去せんとしたが、總理は今挨拶をして來るから、今暫らく話せとの事で有つたから、又尻落ち付けて、快談して、殆ど一時間もして辭去し、羅監察院長邸を訪うた。

羅大人は、目下監察院長とし、鄭總理と並ぶ大官で、且公益の爲には鉅萬の資を投ずる富人であるが、新京は假宅であり、且家屋拂底であるとは云へ、其の寓居の質素なることは實に驚くべく、其の人品洵に欣すべきである。大人莞爾とし迎接し、緊く握手を爲す。座には滿洲中央銀行總裁榮貴、文教部次長協和會理事許汝棻の諸大人等が居て、種々相互の談話が有つた。余は羅大人の前年日本滯在中高名を聴くのみで、面晤を得なかつたこと、又先日旅順に於ては、大人の邸を訪ひ、珍書什寶等を見せて貰ひ度いと、豫

て楽しみにして居たのに、愈其の日になると時間の都合で本意を果さなかつて、遺憾であつたが、今面會を得て昔日の殘懷を一度に拂拭したと申べ、大人は先年日本滯在は暫時で有つたから、日本の諸名家にも面會出來ず、自分も遺憾に思つて居たが、今日の御來訪は大いに満足する所であると申べ、次に

羅氏、聞けば先生は明治大帝御紀編修に従事して居られたといふことであるが、最早完成したか、其の體裁は如何なるものか。

余、即ち既に完成して九月三十日に總裁より陛下の御手許に奉呈したること、及び御紀の體裁は大體に於て編年體であるが、間々記事本末體を交へた所もある。其の體裁は期せずして朝鮮の李朝實錄に相似たる所があると答へ、そして文體は假名交り文ではあるが、漢文直譯體を用ゐられたと付け加へた。

夫れより許文教部次長は、我が樞密院副議長平沼男の制度改革意見を激賞し、諸氏の間に快談あり、是の時羅大人は其の近著遼居雜著一部(四冊)を惠與せらる。之を受け、他日其の揮毫を受くべく約して辭去した。要するに鄭總理は多く語り、羅院長は語らずして聞くを主としたる相違はあるが、共に寛大の長者にして滿洲國の柱石たるは兩者共に一なりと感じた。夫れより歸宿した。

夜大谷派留學生日暮臺雄君來訪して明日の日程等を話し、且同氏等住居の寄宿に寮名を付せんことを委囑して去られた。

十三日晴、朝文教部を訪ふ。西山司長は大同學院舉行の卒業式に臨場の爲に寛城子に赴けりとて不在。福士末之助氏に面接して歸る。本願寺に至り、留學生諸君と露西亞パンを食して午餐とし、食後本願寺滿洲開教監督部主事武田香龍、留學生大道智水の二氏に導かれて長春縣立女子中學校を觀る。女子教育も漸

次盛になり行くべきも、此の校は長春縣に唯一の純然たる滿洲流の學校にして、我が高等女學校に當る物なれども、四年制度なり、學科は詳細の事は言ふ能はざるも、稍簡易なるにあらずやと思はる。筆記等は鉛筆を使用する者もあれども、多くは毛筆にて、細字を速くて巧なり、流石は本場所なりと感心した。校長趙鴻聲氏に誘はれて、三教室を巡覽し、又教材置場並に寄宿舎をも一覽したが、猶不完全たるを免れず。特に寄宿舎の如きは寢具を延べたる儘にして、頗る無作法の如く感ぜらるれども、掃除は行届き居り、其處に日中にも臥したり、腰懸たりし暮すとの事なり。學生は教室等にて粗服を纏へるも、皆富家の女にして、外出等には頗る美裝するそである。學資は月四十圓以上を要する由にて割合に高きを感じたり。一組織ね四十人とし、教室の縁は頗る低く、地上五寸位ならん。參觀人至れば級長と覺しき生徒の號令にて立禮を爲す。

次に新京特別市第三小學校を參觀す、校長馮書春氏亦鄭寧に案内して呉られた。體操、算術、歴史等の授業を觀たが、之れと記すべきことも無い、併し何れも校舎は御粗末である。

午後は豫て依頼して置いたので、純然たる漢人の生活を觀んが爲に、大道氏の案内で、新京市郊外の金安橋東の張國棟氏の邸を訪うた。張氏は温厚の紳士で、新京信託株式會社取締役、鴻發燒鍋兼理で有つて、燒酎醸造を業とし、數百萬の資産を有し、九十人の男女を使用し、邸内は一萬坪もあるべく、四圍に障壁を構へ、境内には復小範圍に障壁を設け、其の中に主人等家族のみ住し、使用人中其の内部に入るを得るは唯六人のみなりと云ふ。主人の室は寢室兼用にて、十疊位なるべしと覺ゆ。一半は土間に椅子卓子を具ふ。壁間に懸額あり、什器あり、次室は土間に八疊敷位なるべし。道に清楚にはしたれど、此大家の

主人の棲住するに、如何にも質素なるに驚いた。主人の案内で工場を巡覽し、主人の室に歸り、小休の後辭去せんとせるに、恰も晝餐の時刻なるを以て常食を饗せんと、時已に三時を過ぎたるに午餐時なりといふ。即ち其の好意を受け、主人夫婦及び大道氏等と共に食卓に就き、孫女等の接待にて、美味を賞玩して後辭す、日本人夫婦の來訪の如きは始めてなりと、張氏夫妻大いに喜び、屋外まで送り出して明年は東京に遊び度しとの事故、來訪を慇懃して辭別した。

支那人の家庭生活といふものを初めて見たが、此の大家族、此の富豪にして、主人等の居室は唯此の二室に過ぎない。其の簡素には驚いた。且此の大家族で厠の設備がなく、皆野天で空地に用を辨すると、狗豚が來つて跡始末をして呉れるといふことである。今一つ此に書すべきは、大道氏は今年初めまでは或る人の紹介に因つて、此の家に寄寓して語學を勉強して居た。必要に迫られて、支那語を日常使用せねばならぬ故、支那語練習には頗る利益があるが、困つたことには、使用人等の間に眼病トラホームを病む者が多數であるから、傳染を恐れて他に移つたとの事、なる程滿支共に大學目藥とか、ロート目藥とかの廣告を能く見るが、不潔であるからか、眼病患者は頗る多いと云ふことである。

張氏本年六十五歳、夫人六十二歳といふことである、好々爺・嬢で十二三歳の孫女と共に歡待の誠を輸して呉れられ、最も愉快に感じ、明年（昭和九年）の來遊せられんことを約したが、果して履行せられるか否か。

寶熙氏は、執政府代行府中令内務部長の顯職に在り、且前清朝庭の皇族といふことで、家門が尊貴なるのみならず、近世絶特の能書家を以て有名である。妻は書道に熱心なる爲め、今回滿支巡遊の機に於て、

支那大家の揮毫の實況を目撃せんことを、本願寺の人々に依頼したるに、恰も好し、大道氏は寶熙邸に入して、同家の若夫人と日支語の交換教授を爲し居るを以て、寶大人と相談の間柄なり、依つて氏を介して面會を求め、揮毫を依頼したのである。四時過ぎ寶邸に至る、猶歸宅せられざるを以て、若夫人等と會して待つ間程なく歸宅せられた。元來同氏は揮毫は好む所なるも、現職就任以來、筆を執ること多きを以て、他の揮毫は謝絶して居られるといふこと故、我等の希望に應じて呉れられるや否や、頗る懸念して居たが、案外簡単に承諾して、我々の爲に二葉書いて與へられた。我々は揮毫の實際を熟覽し且其の結果の對幅を得たのは仕合せで有つた。寶氏は日本の人は草書に巧であると、御世辭を述べて、僕に對して何か書けと求めらる。當方より依頼して書いて貰つたから、こちらも辭する譯にも行かず、止むを得ず歌一首を認めて呈した。コンナ時には平生習字をして置かないことを悔いても詮なく、醜を萬世に残すの結果と成つた。張寶二家は共に大道氏の周旋で且通辯をも煩はした、最も同氏に謝する處である。

一旦本願寺に歸り、畠山・武田・大道・日暮諸氏と共に、白系露人經營のレストランに至り露西亞料理を食し、露西亞ダンスを見た、猶隣席に男三人女四人を伴ひ來りし大官を見たが、これは寫眞で見覺えのある、吉林省長熙洽氏の如く思はれ、問うて見ると夫れに相違ないとの事であつた。

昨夜日暮氏より囑せられた所の寮名は、養正・和順の二名を擇んで其の中一を採取せしめた、始諸氏は余をして標札を書せしむる心組で有つたそうだが、遂に其の暇を得なかつた。又武田氏は鄭總理の知を辱くして居るとの事であるから、同總理の揮毫を囑して來たが、我等歸國後、本年の初頭に珍しく出來の善い鄭大人の一行物を送り届られた。

是に於て予は鄭大人に對して、書翰を以て深謝し、拙著勤王思想の發達一部を贈呈した。

晚餐後畠山師に導かれて、市街を散策し、二三の買ひ物を爲して歸宿した。

之で新京は見物済にした、洽爾賓に赴くべきや否やを考慮し、協議もし、種々聞き合せもした。航空機に由れば簡單なれど、これは豫め申し込み置かねば、直ちに乘れるか否か分からぬ、汽車にすれば、夜間は運轉せぬ故、三日間を要し、朝鮮が後れて、金剛山の紅葉は散る、且吉林を見る暇が無い、是等の理由でハルビン行は止めることに決心し、翌早朝から吉林行きと決して、荷物を作り十二時過ぎ寢に就た。

吉 林

十四日晴、早朝神吉氏に送られて、新京驛に到り、六時三十分同驛を發して吉林に赴く、三時間にして吉林に着く、途上は遙に連山を望み、川あり坂あり墜道あり。田畠遠く開けて、水田少なからず、昨日まで一望原野にて高低なく水流なく、モノトナスな眺望に引き換へて、殆ど日本内地を旅行する様な氣持ちがした。吉林驛では大谷派本願寺駐在田中道磨氏の出迎へを受けて、其の案内並に通譯に依つて便益を得た。松花江流れ清く、汀際に衣濯ぐ婦女多く、北山の眺望亦甚だ佳、日本人は此の地を滿洲の京都と呼ぶとのことであるが、成る程地勢は多少似た所がある。唯市域の小にして水流の大なるを異なりとする。北山寺はさしづめ叡山に比すべきであるが、市と餘り近く否市中にあるので、京ならば東山智恩院位に相當する。田中師と共に此の寺に登り、市中を俯瞰し、暫時休憩した。此の寺は藥王廟と言つて、禪の臨濟派である。輪奐の美天然の勝景と相叶つて、立派なものである。一體吉林には禪・淨土・天臺・眞言等があり、

禪の中でも臨濟・曹洞・法眼等が揃つて居り、中々大寺が聲を聳やかして居る、其の他道教・基督教・回教・喇嘛教・シヤマニズム・家理教・紅十字會等何れも中々活躍して居る。其處へ日本から佛教各宗、神道諸派も入り込んで居る。これ等を詳細に視察して居る暇は無いから、手近な北山だけにして大谷派の布教所に抵り、晝食を濟し、午後一時新京行き汽車に投じ、四時新京驛に到り、神吉氏より荷物を受け取り、同氏及び大谷派關係の人々に見送られて、奉天に向つて南下した。

家を出でてから三週間、これで北支南滿の觀光は終へたのである。新京に心残りなのは餘り押強く執政に面謁を求めも如何と差控へて置いたが、之は失敗で却つて謁見して、建國の賀詞を陳べるのが宜ろしかつたといふことある。又新京には余が山形中學校に居た時分の生徒で、結城清太郎氏が滿洲國國都建設局長代理兼總務所長を勤めて居ることを後に聞いた。抑新京の發展は目覺ましいことで、一例を挙げれば昨昭和七年の末頃には自動車は僅かに十二臺に過ぎなかつたのが、其の後一年以内で唯今では七百餘臺あるといふことである。家も車も拂底で、無造作に出懸けて行くならば、旅宿に大困難するのである。乗り物には自動車・馬車・人力車があるけれども天津や北平等と違つて、何れも皆急いで走つて居て、客待ちして遊んで居る物は一臺もなく、車を拾つて乗らうなどと思つても容易に得られない。そこで國都建設に急いで取懸つて居るので、人口五十萬を入れる都市の大計劃で、市内を往來すると道路や家屋の建設に従事して居る凄じい勢を看取する。結城氏は其の局長事務即ち總本締めをして居るのであるから、逢つたら色々有益な話が聞けたらうと思はれる。

新京の名所舊跡などは元來新京は一小僻邑に過ぎなかつたので、從來立派な寺觀も無かつたで他に觀る

べき所は少い、今は日本の神佛各宗が大競争であるが、如何なる名所が出来るか。夜十時奉天驛に於て乗り換の爲に下車、沼田少佐驛に在つて、豫ねて依頼し置きたる乾隆帝の拓本を受け取り、十時三十分發汽車にて安東縣に向つた。此の夜雨降る。

平 壤

十五日、早朝安東縣に着した、此の地は日本税關の設けがあつて、税吏が車中に來て検査する、頗る嚴重であるが、我等は何物も無いので直に濟んだけれども、検査容易ならずして、下車せしめられた人もあつた。音に名高き鴨綠江を過ぎて正午前朝鮮平壤驛に着した。朝鮮殖産銀行の支店員及び東本願寺別院の僧侶諸君合せて十數人の出迎へを受け、直ちに鐵道ホテルに赴き、午餐後支店長代理倉品鐵夫氏夫妻、及び林支店長夫人等に案内せられて、市中及び日清戦争の戦跡たる牡丹臺附近を見物した。大同門は大同江に枕む平壤の正門で、練光亭は文祿の役我が小西行長が、明の沈維敬と講和談判をした所であると言ひ、玄武門は余が親友三村幾多太郎大佐（當時中尉）が部下の原田重吉に命じて眞つ先きに壁内に躍進せしめて破つた戦跡なので一層懐かしく、普通門は九百年前の建設にて古代を偲ぶことを得、總て大同江に臨み、樹木鬱蒼として名勝と史蹟とを兼ね、我等をして低徊去る能はざらしむるものがあるけれども、去りて箕子陵を訪ひて歸宿した。是の夜東本願寺勤務澤村文秀師來訪せられたので、種々朝鮮の宗教の形勢等を聞いたが、餘り香しい話も無かつた。

十六日晴、京都帝國大學教授濱田耕作博士は滿洲へ赴く往路余等と同宿故、此の朝早く來訪せられて、

暫時談話。食後殖産銀行員に伴はれて平壤博物館に至る、同館は樂浪發掘物陳列の爲に最近建築せられたる所で京都大學教授和辻哲郎氏に會し、共に田澤金吾氏に導かれて陳列品の説明を聴取す、土器、明器等旅順博物館に在る物と民族關係ありと思はるゝ品少からずと覺えた。館の南傍に去る十日より縦覽を許さるゝに至つた珍奇なる大木槨あり、大きき十餘坪あらん、内に四棺を納めてある、皆木棺で漆塗である。縦覽後和辻氏は江西に向ふ、江西には有名なる大石棺がある、其の模型は此の平壤博物館にもあるが、其の實物を見に行かれたのである。我等は樂浪に向ふ、樂浪にて發掘したる墳墓及び京都大學助教授梅原末次氏等の發掘作業を見る。發掘は三ヶ所にて行ふ、梅原氏擔當の分は曾て盜掘せられたる所なれども案外殘留品多く、且最も有益なることは、從來實例を見ざりし羨道と玄室との間を閉鎖し、其の戸外に机を据ゑ、其上に供物ある所を掘當たことである。羨道中にて祭禮を行ひ其の供物を直に埋めたのである。是あるべしと從來想像して居たものゝ猶實物を發掘するに至らなかつたのに、今此の實例を見ると喜び居られた。余も從來羨道古墳には可なり注意を拂ひ、玄室前即ち羨道に於て、享祭することは必ずあるべしと憶想して居たのに、今其の例を見ることを得て頗る同感で、大切の遺失物を再び入手した様な氣がした。三個所の發掘状況を見て、歸途に就き、銀行員と袂を別ち、八千代町の大谷派別院に立ち寄り、六時平壤驛に於て多數の見送人と分かれ、京城に着いたのは九時半頃で有つた妻の實弟京城殖産銀行理事植野勳氏等に迎へられ、直ちに同氏宅に着いて一先づ歸宅した如き安心をした。

京 城

十七日晴、朝京城帝國大學教授大谷勝眞氏（光徳院連枝）に電話にて着京を報ずると、暫時にして同氏及び同大學教授藤田亮策氏が來訪せられたので共に出でて博物館に至る、藤田氏は同館の顧問を兼ねて居られるので、丁寧に説明して呉られた。午後は小田省吾氏の厚意幹旋に由り、大谷氏に伴なはれて德壽宮を一覽した。同宮は全く支那の宮殿を模したる建築なれども、紫禁城に比すれば規模狭小にして、見劣りする感を免れない。同宮を出てから朝鮮神社に詣した。是の日は會々神嘗祭で、同神社の大祭日に當つて居るので、市中も山車等にて頗る股賑、神社も境内に生花會を催され、賽客多し、次に大韓國阿彌陀本願寺なる韓國皇帝の掲額と、朝鮮の古鐘を以て有名なる東本願寺別院に詣した、輪番栗田師は生憎不在であつた。去りて新建の春畝山博文寺に詣る、規模といひ、土地高燥にして風景の佳なることゝいひ、同府第一の大寺たるは明である。次に高野山別院に至る、規模は到底博文寺に及ばないけれども、現輪番龜山師が着任後一年有半にして、此の大伽藍を建立したといふ事實は、其の手腕の程驚嘆に値すと謂はねばならぬ。人能く道を弘むとの語、昔其の語を聞く、今其の實を見るの感あり、新開教地の駐在布教者の選任は益々以て緊要なることを感じた。輪番夫妻と晤談暫時、經營の苦心談やら自慢話しやら聞いたが、同別院熱心の生花の稽古は餘り成功で無いやうで、今一趣向の餘地が有さうに思はれた。

十八日晴、朝妻の同窓田中初子（京城帝國大學助教授田中梅吉氏夫人）來訪、余一人大學に大谷教授を訪ふ、午前は是等の事にて過ぎ、午後大谷氏と車を同じうして大學を出で、景福宮門前に於て、妻及び植野夫人と會し、李王職雅樂所に至り、同所雅樂師長咸和鎮氏の雅樂論を聴き、樂器及び生徒の練習を觀る。次に二時より景福宮の禁苑を觀る。此の園は固より禁苑なれば、容易に觀るを得ざれども、小田氏の厚意

にて觀覽を許されたのである。守苑の吏員の説明を聴く、同じく觀覽する者二十餘人、道に泉石の布置、臺榭の構造、庭園の配置等間然する所ないが、唯北海公園等に比すれば規模小なのは止むを得ない。併し亦愛賞に値する。次に經學院に詣る、同院司成金完鎮氏に迎へられ、明倫學院講師兼經學院司成安寅植氏の説明を受く、同氏は會て、我東京に留學せしと云ふ、明倫學院は従前科擧を執行する堂で有つて、經學院は孔子廟である。經學院は支那の孔子廟に倣ひたる物、規模小なれども、掃除行き届きて心地善し、此處のみならず、朝鮮は渾べて支那の如く、塵埃堆積せず、乞丐まつはらず、洵に快適である、見終る頃黄昏なるを以て歸宿した。

金剛山

十九日晴、朝京城驛出立金剛山に向ひ、途中行き違ひを生じた、此の邊汽車の往復少く、列車と列車との間二時間以上もあり、且事務不整頓驛夫車夫等頗る不親切にして、毎驛高聲に呼ぶこと殆どなく、況して乗り換場所等を指示すること等は故らに問ふにあらざれば決して注意をして呉れない故、土地の人と雖も往々乗り越しを爲すこと珍しからず、況して遠客の乗り越し等は常の事なりといふ、遂に鐵原に宿した。二十日朝、同驛出立内金剛に向ひ午後一時内金剛驛着、午餐後案内人を備ひ探勝に出懸たが、是の日は唯長安寺、明鏡臺を見て歸宿した。長安寺は内金剛に於ける最大の寺院である。自然の景勝中に此の人工藝術を見るを以て有名である。明鏡臺は靛赭色の長方形なる巨岩壁立し、岩面偏平にして鏡面の如く、紺碧の黃流潭前面に湛へ、玲瓏玉の如き水面に、四面の靈峯を映じ、見る者をして崇高の念を生ぜしむ。

二十一日晴、昨夜命じて置いた案内人及び駕籠二臺來る、駕籠は藤椅子の兩側に竹竿を結び付け、擔夫二人にて昇のである。而して手代りとして一人控人夫があり、結局一挺に擔夫三人を要する譯である。我等此の駕籠に打ち乗り、七時旅宿を發した。疾きこと疾風の様であるが、時々肩代を爲す爲に休息する、絶景若しくは名勝に至れば説明の爲に止まるので、比較的超スピードとはならない。三佛成・表訓寺・萬瀑洞・摩訶衍等の名勝を過ぐ三佛成は路傍の巨岩に釋尊及び兩挾侍の三佛を彫刻せる物側面に六十佛を彫刻してある。萬瀑洞は溪流に沿ひて進む時に、周圍の情景奇絶怪絶にして蒼松亂立、足下碧潭あり、飛瀑あり、急湍あり、水石相激して妙趣言ふべからず、内金剛に在りては蓋し絶景の尤なるものと思はれる。午時恰も毘盧峯に達す。

毘盧峯は内外金剛山二千衆峰の主峰にして海拔千六百三十八米（凡そ五千尺餘）ある。東は外金剛を隔て、遙に日本海の怒濤を眺め、西は内金剛の諸景を一望に集め、眼下の巨巖深溪見るとして絶景ならざるはなく、各種の山嶽趣味を完全に具有して居る。我等未だ蜀棧吳峽の景を知らないけれども、蓋し劣ること無かるべしと想像する。朝鮮人の民情は此の絶景に幾分か養はれた所があるだらうか、山水の効は其處にあると思ふが、其の邊我等は思ひ當らぬのは遺憾である。唯我等の遺憾とした所は探勝が三四日後れて、内金剛の紅葉は既に七分通り散り果て、毘盧峯に於ては全然落葉して紅葉は影を留めず、且此の邊は殆ど恒緑樹は無いので、實に文字通りの枯木寒林で、樹木の景趣はサツパリ無く、此の頂上に在る久米山莊の宿泊所も既に三日前に引き拂ひ、今は唯晝間の茶呑所がある計りで、皆が大いに遺憾に思つた所である。併し先づ此處に一休みして双眼鏡などを用ゐて、四方を眺め廻し、辨當を濟まし、復た駕籠に打乗つ

た。此處からは下り坂である。幾分樂かと言へば、急坂の下りは餘り樂なもので無い、併し我々は足は餘り用ゐないので苦樂は關係が薄いが、駕籠からすべり落そうな氣がしたのは、上り坂で仰天したのと孰れが樂で有つたらうか、暫時にして金剛門に辿り着いた、巨巖で包まれた一坪ばかりの穴道即門を潜ると、其處に現れ出たのが全山第一の難所だ、婦人などは毘盧峯を越ゆべからずと折紙付きに成つたのは此の難所があるからだ。斷崖絶壁眞に矗立せる巨巖に、長さ二十有餘尺の幅一尺五寸程の鐵梯を下る、一梯下れば又一梯あり、此の下の梯はとまるべき手摺もなく、眞個無氣味の藝當であつて、氣の弱い人には先づ禁物である。此の難關も昇夫等の助けもあつて我等夫妻は先々通過した。夫れからの急坂は實にヒドイ、無論駕籠にも乗つたが、下ろされた事も度々で有つた。三時半頃九龍淵に着した、飛鳳瀑と共に外金剛最高所の絶景である。瀑の邊り左右の巖石は彌峻險、境趣益々幽邃唯見る天の一角より雨と降り、霧と散じ、瀑水聲々として落下する其の景遂に望めば恰も鳳凰の飛翔するが如き觀がある。是れ其の名の來る所以である。九龍淵は洞窟の如き絶壁の對岸、斷崖絶壁の頂上より落下する瀑布で其の高さ百七十餘尺といふ、山中第一の大瀑で、宛然銀河を傾瀉する觀がある。併し此の瀑よりも寧ろ瀑下一圓一枚の碧岩より成り、水に穿たれたる深淵如何にも蛟龍龍蛇の棲息せんかと思はれる碧潭削壁に彌勒佛と大書してある。其の佛字の豎棒の長さ三十尺と云ふ。其の他四圍の境趣最も偉觀と云ふべきである。

神溪寺は内金剛の長安寺に對する好箇の大伽藍で、四周悉く靈峯を以て圍まれ幽邃閑雅堂塔樓閣は復古の史料と爲すに足る物もあり、創設以來千五百年に垂とする古刹、今に盛榮を極むるは最も歎賞すべき所である。中にも石塔は新羅法興王創建當時の物で、構造精巧全鮮でも有名に成つて居る。時既に夕暮近く

成つたから案内人を急がして温井里に着した。温井里は外金剛山麓に在る小村に過ぎないが、清冽なる温泉の湧出を以て名高く温泉旅館は温井里ホテルを始め、立派なのが數軒ある。然るに觀光客の多いことは驚くべし、何れの旅館も大入り満員で、後れて到るものは皆御コトワリを喰ふといふ有様、我等兩人は案内人が近付といふ因縁で漸く萬龍館に止めて貰つた。室は善いのは當てられなかつたが、温泉は特別室で洵に氣持が善かつた。一ヶ月の疲勞を一浴で回復したやうな爽快味を覺えた、晚餐を済し、再浴の後十時過ぎ就寢した。

二十三日雨、温泉で二三日も休養したい希望は山々で有つたが、ソゝもして居られぬので、雨を冒して萬物相に出懸けた、麓より登るのである、左程急峻ではないが、兎も角も半里の山道岩角を雨中登るのである。例の駕籠は昨夕別れたので、今日は徒歩であるから可なり苦しい。兩三回茶店で休んでは登つた。其の半里の間は溪流を隔て、左岸の絶壁には一面に楓樹が茂生して、今を盛り或は聊か盛りを過ぎたとして満崖皆紅葉である。其の色の善さ迎も内地で見受けられぬ、又内地では上州・信州あたりの紅葉は、大抵雜木林であるが、此の地は全部が楓樹であり、而も其の葉が大きい、此の溪が即ち寒霞溪である。

萬物相に行き着いて見ると、三仙巖の屹立せる相は、偉觀・壯觀・怪奇其の溪谷の大は毘盧峯に及ばないけれども、巨巖屹立の狀は却て勝るものあるを感ずる。新萬物相は之と匹敵する絶景で、頂天女峰を越えれば、天仙臺を始め、絶景の立て続けであるといふが雨中と云ひ、嶮岨と言ひ、最早絶景にも満腹した所も有り、夫れより時日の切迫で止むを得ず、温井里に引き返すこととして十一時半頃旅館に歸り、一浴して午飯を済し、一時出發のバスに乗じて安邊驛に出で、一時三十四分同驛を發した。雨も晴れて、海金

剛の勝景を汽車より望見し、夜九時過、京城に着し、大谷、植野等諸君の迎ひを受け、例の植野氏宅に安着した。

二十四日晴、是の日復京城見物である。朝大谷教授の邸を訪問して、敬意を表し、次に朝鮮の家庭を視察のため、殖産銀行員林錫弼氏に導かれて、三戸の家庭を見せて貰つた。皆中産階級かと見えた、朝鮮の家は皆居室の配置が定まつて居て、内地の玄關に當る所に板の間があり、其の兩側に主人室・主婦室・客室等が其の家の財産・家人の好尚等にて、室の廣狹・結構は異なるが、内地の如く床間・書院・押入等は無く、又支那の如く、周圍に城壁を廻らすことは無い。押入の代りに簾笥が幾個も並べてある。簾笥は皆樟材を以て作り、前面は銀金具を張り、頗る立派で價も高價な物が多い。此の中には衣服は勿論、夜具等も收めて在る。我々に見せる爲に故らに清掃せられたのかも知れぬが、皆掃除は能く行き届いて居た。且毎室オンドルの設けが行き渡つて居て、暖房装置は十分である。朝鮮に又特別の事は如何なる家も味噌・醬油は各自に製造した瓶に貯へて居る、富裕な家程澤山貯藏して古いのを使用する、夫れ故飯食物等の調味は各家各別で、内地の如く龜甲萬とか山サとかいふ品を門並用ゐる事は無い。併し近年「味の素」を加味し出したと言ふことである。其の他漬物は非常に骨を折り、金をかけて各戸で製造して、互に風味を自慢して居る。之も瓶を並べて種々の品を貯へて居る。最後に申錫雨氏の邸を見せて貰つた。同氏の家も其の構造は珍しい事は無いが、同氏は元來朝鮮の志士で有つて、獨立の見地に立つて一新聞社を主宰し、總督府より睨まれ、新聞を廢刊し、久しく南方支那に踏晦して居たのを、近年歸國し、家居して居た所、昨年父翁を喪ひ、今や喪中なりとて、縗布を着し、特に近日一年忌日に當るを以て、其の祭祀を行ふとて、其

の供物の菓子、籩豆の製造等、親戚故舊打集ひ、三十餘の人々皆祭祀の準備に多忙の有様は實に驚歎すべきである。我等を歡待して、供物に用ゐる自家製の淨潔なる菓子一盆を贈與せられた、我等受けて歸來玩味するに風味最も可である。内地や支那に於ての儒式の葬祭なるものは知らないが、朝鮮に於ては實に鄭重なもの大懸りの者である。葬祭の爲に資産を倒盡する者があるといふが實際ソウであらう。此の夜明月館に於て、始めて朝鮮料理を喫したが内地で評判のわるい程不味ものとも思はなかつた。是の夜十一時三十分京城驛發の急行列車「光」列車の名に乗つて、内地に向ふ、大谷・植野・大谷派別院・高野山別院の人々に送られて、京城に別れを告げた。

慶州

二十五日晴、早曉六時三十四分大邱驛に着す、殖産銀行員自動車一臺を伴ひ來り迎ふ、直ちに之に乗じ慶州に向つた。八時頃慶州博物館（具さには朝鮮總督府博物館慶州分館と稱す）に着し、朝食を爲し、館員崔順鳳氏の説明にて館内を一覽した。發掘物のみであるが、其の品は概ね我が内地の發掘物と異なる所は無い、唯鮮地の發掘物中には鏡が少くない、此處も御多分に漏れず、鏡鑑は極めて少いやうに思つた。土器は我彌生式土器と殆ど同一であるが、我が國の極初期と思はるゝ物は見なかつた。況んや我國の物の以前に當る如き品物は全然無くて、却て我國でも第二期ともいふやうな發達した物が多いやうに感じた。余は考古學には甚だ疎い者であるから、見損ひも無いとは言へぬが、全く然く感じた。ソウすると其の理由は如何かと自分ながら釋然たる解釋を得ぬが、兎も角余が從來信じて居る通り、任那・新羅は我國と同じく

倭人が住して居たに相違ないと一層確信するに至つた。慶州には墳墓最も多く、殆ど大和邊を見る如き心地した。崔氏の案内で幾分は見たが、當時發掘に取掛かつて居る所までは行き得なかつた。

佛國寺に詣した、此の寺の規模は元來頗る廣大なものであるが、今は小く成つて居ても中々立派な物である。夫れから駕籠にて石窟庵に登り、大石佛を拜した。朝鮮婦人が參詣して、地に跪いて三拜する敬虔の態度を見て感心した。慶州・佛國寺・石窟庵等の事は我が學界には餘り有名で知れ渡つてゐるから、今は何も言はない、唯日本内地と能く似て居るといふ感じを懷いたといふことを告白する。佛國寺に歸來午飯を済して、又自動車中の人となり、新羅太宗武烈王の陵を訪ふ。王は我が齊明天皇と時を同じうして居るが、陵制は内地では圓墳時代であるが、新羅では土を盛りはするが墳陵といふべき程でなく、寧ろ石塔が主と成つて居る。此の陵の周圍には十二支の神像が方角の順序に置かれてあるのは珍しくて有名である。内地にも敏達天皇の皇女吉備姫王檜隈墓等に周圍に石像のあるのと似た所がある。夫より又車を馳せて蔚山籠城の跡を訪つた、同所今は公園に成つて居て何人も入り得るが、可なり高所の頂上に築かれた物である。日本海に枕んで、昔と雖も兵糧は海路より搬入する便は有つたであらうと思はれるが、出先きのみで内地には籠城の事實も知らず、援兵を送ることも出来なかつたか、水軍の不振が禍して加藤・淺野を初め籠城の將兵を苦しませたのか、天氣朗かの中に飛行機の滑走するを見ながら車を驅る。五時頃東萊温泉場に到り、入浴の間をも得ず釜山に赴き、埠頭に至つたが猶時刻が早いので市中を見物し、土産物等の買ひ納めに時を移し、時を計つて、關釜連絡船に乗り込む、此の夜服部宇之吉博士と互に隣室にあつたが、互に相知らずして一夜を過した。

歸 朝

二十六日晴、朝七時下關に上陸、驛前旅館に於て朝食を爲し、安徳天皇阿彌陀寺陵に參詣し、春帆樓を一覽し、李鴻章遭難の場所を経て、旅館に歸り、九時發上り急行列車に乗せんと驛に到り、帝室博物館美術部長溝口禎次郎君と邂逅した、同氏も滿洲より歸途で有つて、昨夜同船したのである、次に又服部博士夫婦に面晤し、皆同列車にて東上の途に就いたが、各自室を異にし、服部博士は宮島見物の爲同驛で下車せられた。午後九時三十九分京都に下車して一泊した。

二十七日晴、大谷派本願寺に詣し阿部總長・龍山・竹中兩參務・朝倉贊事等に會談し、兩堂を拜し、法主臺下並に裏方に謁して、感想を話し、退いて晝食を饗せられ、午後高尾・横尾・梅尾の景勝を訪ふ、猶秋色皆づれず、神護寺貫首谷内僧正を訪ひしも不在、歸路嵯峨に到り、大覺寺に詣り、門跡藤村密幢和上に迎接せらる。晩は阿部總長等大派本願寺上局員の招待あり、京都ホテルに於て歸朝を祝せられ、同夜八時十分京都を發し、二十七日朝無事歸宅した。

感 想

北支滿鮮地方を旅行して、第一心頭に浮ぶことは、國家興亡の因である。此の大問題を此所で深く論ずる場合で無いが、到る所皆興亡の頻繁な地方だけに、自ら頭に浮んだ當座の所感だけを書付けて見るならば、他の政體には又別の方式があらうが、君主政體の國に於ては、最も大切なるは宮中府中の關係である。

諸葛武侯は「宮中府中俱爲一體」と言つた、然り宮中と府中と常に意志相通じ、疎隔あるべからざる點に於て、一體で無くてはならぬことは勿論である。併し一體である極端は獨裁專制に陥る。佛國のルイ十四世が朕は國家なりと稱して、盛に專制の君主權を振舞はし、遂に國家の衰弊を招致したのは、宮中府中一體の弊害である。大奈翁の帝政も、此の覆轍を踏んだものである。宮中府中は必ずある種の嚴堺を要する。此の嚴堺を越ゆれば、必ず弊害は免れぬ。さればと言つて、餘り別が有り過ぎるのは、亦大に弊害がある、我國の幕政時代の如きは、其の弊竇に陥つた標本であらう。

我等は曾て平安城建設は、其の模範を唐の長安に取つたことを聞いて居り、又其の建築の模様は承知してゐる。大極殿仁壽殿等の宮殿から、太政官・八省等朝堂院の配置を知て居る。是れは宮中府中の關係を保つに最も好い配置であると思つて居た。且迂潤にも支那は後世までも多少是れに似寄つた配置にでも成つて居るかの様に思つて居た。然るに行つて見ると紫禁城なるものは、全然宮殿のみ獨立した宮殿で、近くには府中と言ふべき如き總理衙門も其の他の官府も一もない。ソシテ政治の實權は城内深宮に靜居して居る、外國の事情も下民の疾苦も知らぬ、庸主が專制獨裁して居るのである、是れで善政が施せる譯がない。清末の宮中の如きは、政權は其の君主にもなくて、一にも二にも官宦女豎の手を経ねばならぬ西太后が掌握して居て、大臣學士と雖も、其の前には何等の權威が無い、斯くの如くして、國の亡びざらんことを欲するも、難い哉である。宮殿樓閣臺榭は善盡し美盡したる宏大な建築でも、諸官府の如きは何處に在つたと言つて呉れる人もなく、首府南遷後は、不用に成つた建物も多からうが、如何に用ゐてあるか、公共の大きな役を勤めて居る物は無い様子である。建物の如きは如何でも宜しいとも言ひ得るが、之れが矢

張權力を標象する事は争へない。かゝる有様では重臣等が君主に祕して、私かに斷行する事も有らう。之れが習慣と成つたり、規程と成つたり、相應の大事を專行する。是れでは宮中府中は却つて一體に成らぬことは一定である。ドチ道國家の覆亡を招く次第である。

奉天などでも、張學良の住宅とか、湯玉麟の居邸とかいふ宏壯な建物はあるが、官府としては僅かに兵器廠位の物である。張湯等の住邸は無論我國など官邸と同じく、公用にも使用せられたに相違ないが、弊害の生ずる所は、此所にも潜んで居ると思はれる。斯くの如く公私混淆に近き有様であるを以て、官吏は常に私腹を肥すに汲々として、國家民人は第二とする。是れで以て國家の滅びざらんことを欲するも、豈得べけんやである。

要するに至る所大清帝國の盛時を追懐するに足る所の大夏高樓は、蔓を并べ軒を連ぬるあるも、之れ却つて悽慘を感じ、痛歎長恨の因である。易姓革命を以て國體とする悲劇の跡を追憶回想して、暗涙を催さざるを得ざる次第である。之れに反して我等何の宿因有つてか、萬世一系の國體を嚴守して、天壤と與に無窮なる大日本帝國に生を受けたる、至幸至福に想到して、私かに又大に喜んだのである。併し又唯喜んだばかりでは足りない、此の國體を擁護し、長へに光輝あらしむることに努力せねばならぬと、つくづく感ぜさせられ、心に誓つたことである。夫に就いても、宮中府中の關係を、明治天皇が適切に御定め下された立憲政體の樹立を深く喜ぶ次第である。

日本人の發展は北支に於ては、今や停頓狀態否衰微の有様である。遺憾な次第であるが、支那政府の南遷で官人の減少もあり、又國交の何となく圓滿を缺くこと、銀價の騰貴・關稅の引上等種々の障礙で商人

の退去等相續いで、在留人の減少は止むを得ぬ。我々が北平を訪うた頃即ち一ヶ年前には北平の日本人は九百人程といふことであつた、併し近頃は多少増加したといふ噂を耳にした。此の増減と云ふことは、發展に大關係あるには相違ないが、北支に失つた幾層倍も滿洲に増して居るから、諦めることが出来る。が併し何地を問はず、官邊より民間の方が緊張を缺いてるではあるまいか、特に婦人が弛緩してゐるやに見受けた、何地に行つても、何階級の人に向つても、内地とコチラと孰れが善いかと聞いて見ると、九十パーセント以上コチラへ來て居る方が善いと云ふ、何ぜかと理由を糺すと、異口同調で氣兼ねなく呑氣なからと答ふ。即ち各家庭では殆ど皆支那人をボーイに雇つて、自らは何等の仕事もせず、唯奥様で候と構へて居る。氣樂に相違ない、且支那に於ける交際の具合は餘り知らぬが、滿洲や朝鮮に於ては、日本人は大體に於て一段高く標致して居られる、即ち總ての事情が其の虛榮心を満足せしむるに足るので、内地へ歸りたくないとなる、尤も同情は出来るが、感心は出来ぬ次第である。併し又一方から考へると、四六時中本國へ歸り度いやうでは猶更困る、海外へ出て第一線に活動する人々が、出先の住居を樂んで落着いて居るのは好いことである。願くば今一層緊張し、第一線に活動するといふ任務を認識して、虛榮心や娛樂欲などを満足せしむるに止まらないことを切望する、婦人のみならず男子は猶更である。

日漢鮮人の特異性や優劣を感じた儘を言つて見れば、矢張日本人は優秀であることが感得せられる。日本人は總てに對して敏捷活達である、漢鮮人は鈍重である。鈍重必ずしも悪いでは無いが、小さな所に不正直な所があり、猜疑心が深いようで、又餘り利益に執着して、其の點にズーン／＼しい様である。漢鮮人は勞働者としては、體格も善く、腕力も強く、忍苦の性質に富み、粗衣粗食に甘んじ、氣候の寒熱に慣れ、

何れの點から言つても、日本人よりは適して居る。斯る有様であるから、日本人移住者が農工業に於て、漢鮮人を凌いで成功することは、非常に困難であると識者も憂慮して居る、これはさもあるべき事と同憂の次第である。暹羅に於て南洋諸島に於て、支那人が成功して居る所謂華僑の多いのは、彼等の強點を立證するものである。併し日本人は腦力が發達し、團結力が強く、事務の才に富み、頭が組織的である。滿洲の如き日露戰爭以後殆ど三十年間、支那人は持て餘して居た、張作霖の如きは、日本から多大の援助を受けて、漸く治安を維持したが、結局眞に國家の形成は出来なかつた、彼には獨立國家を建設する考へが無かつたからと言ふかも知れない、夫はそうでも有らうが、馬賊の出没、貨幣の亂雜、警察の無統制等は殆ど半獨立の滿洲に君臨した張氏は之れを整理すべきで有つた。斯る缺坎を顧みず、唯中原に野望を懷くのは本末轉倒である。之れは彼れが己れの治むる領土を全く夷狄視し、狄夷は治めざるを以て治むといふやうなる傳統的な粗大な考に陥つて居たのであるまいか。然るに日本の勢力が十分に及ぶと、時を経ずして滿洲帝國は面目を一新して、獨立國家を建設して、體形を整へ、早い話が野天市場である、支那の内地には到る所の都會に之れが有つて、泥棒市場と稱し、實際贓品を陳列して販賣して居る、これは長き間の習慣で此の所には手を入れぬことゝなり、内外人共笑つて済まして居る。然るに大連市では日本の警察が行届いて同じ様な市場は存在しながら、決して贓品では無く、正當の商品であるといふ事である。一度び日本人の手にかゝると萬事が淨化せられる、假令潔癖で水淨ければ大魚棲ますとの古語もありとは言へ、彼れに比して此れを優秀と言ふべきではあるまいか。且夫粗衣粗食に甘んじ、鞭撻を受けて勞苦に服することは彼れに一籌を輸するとも、廉耻を重んじ、忠君愛國の念強く、團結して事に當れば決して、敗者と

なるやうな事はあるまいと思ふ。夫れ粗衣粗食に甘んじ、艱苦に堪ふるといふは下等な獸的強味である、虎狼は人間よりも強い、人間は一騎打ちでは野獸に叶はない、併し知を以て彼等を制する、恰もソナナ關係がありはすまいか。漢鮮人とは到底生存競争は免れぬ勢である、而して此の點に於て彼等は野獸よりも大敵である、油断は決して成らぬ次第である。夫には彼等と眞正面から彼等の得意の壇場に争ふべきではなく、日本人は指先きが器用である、精巧な細工は概して世界に於て優秀者である、日本は機械文明に後れて世界の仲間入りをした結果、従來は西歐文化國よりも製作品で劣つて居た仕事も有つた。彼の望遠鏡や顯微鏡に使用するレンズなどは近頃までは、獨逸品を輸入して居たのを、今日では彼れを凌駕する如き品を製造するに至つた。これが彼國では如何か知らぬが、我國では全く指先の練熟に外ならぬのである。又人に使用せられて勞役に服することは勝味は無くとも、人を指揮し全體的に能率を擧げることが得意である。彼の奉天の兵器廠の如き、張學良時代には二萬人も掛つて製造して居たのを、今日同一工場を統理して、同一能率を擧げるのに四千人程で從事して居る、斯く列擧し來れば、猶多くあるであらう。天二物を與へず、互に長短得失のあるのは、自然の配劑宜しきを得て居るのである、我等如き者が容喙するには及ばぬ譯で、何人も熟知の事であるが、相成るべくは性急に競争などせず、長短相補ひ、相互扶助して共に健全な發達を遂げしめ度いものである。併し兎角人は目前の利益に迷ひ易いもので、頭の良い日本人でも性急にして失敗することも有りはしないかと、憂慮せられる次第である。ことわつて置くが、滿洲帝國は二千幾百萬人は漢人で、眞の滿洲人は少いので、上來漢人と言つた中に、眞の滿人も含まれて居るのである。

漢鮮人の比較、漢人と鮮人とは矢張漢人が勝れて居るとの事である、これは長き歴史が明かに證明して居る。支那には古來世界的大偉人を輩出し、世界的大事業を成して居る、朝鮮には世界的人物を見受けず、世界的大事業をも成して居ない。併し夫は夫として、今日一般民衆として實際如何かといふに、官邊の人の話を聞いても、支那人は中々朝鮮人とは同一視出來ぬ、朝鮮人と同一の考を以て掛ると失敗すると云つて居る、第一支那人は交際術が巧で掛引宣傳等は日本人も及ばぬ所で、中々油断がならぬ。又朝鮮人は怠惰の所があるが支那人は勤勉である。次に朝鮮人は目先きの事のみを見て、永遠の計劃を忽にする傾向がある、支那人は永遠の事に注意するやうである。一例を挙げれば朝鮮内地では樹木を濫伐して、都會附近は皆秃山計りで有つた、總督府で苗木を植ゑても、之れを盜伐するので、其の監視に骨が折れた。今は青山と成つて、第一に景色がよく、經濟上非常に益がある、支那人はソナナ短見ではない、北平天津邊に樹木は乏しいが、平地で實際確確で生へぬのであらう、他の點から推すと即ち貯金などに熱心な點等を見ると、行く先の事を考へて居る點が多いとの話も聞いた。

風采に於ても朝鮮人よりは、支那人が立ち勝つて居るかと思はれる。支那人は長大で姿勢も宜しく、婦人などは美人が多い、尤も之れは我等は北平近邊だけを見たので、大國支那の全土から云へば九牛の一毛であらうが、勞働者の仕事を見ても、朝鮮の方はまどろかしい様に見受けた。且今日でも優秀な人物が支那人中には存在する、我々が新京で面晤した所の鄭孝胥・羅振玉・寶熙など云ふ人は、何處の國でもザラニ有る人物では無い、其の品格と云ひ、學識と云ひ、言行と云ひ、先づ何處へ出ても引けを取らない人物と云へよう。其の他榮貢と云ひ、熙洽と云ひ、一寸見たゞけであるが、相應の人物と見受けた、朝鮮人に

は是等の人物に匹敵する人物は未だ曾て出會申さぬ。然れども唯一つ朝鮮人は支那人よりも清潔にして居ると我等は感じた。素より極めて下賤の苦力などは何處も同じものであらうが、中流以上の家庭の實況、小商人等の店頭、寺觀等の内部、是は或は日韓併合以來の事かも知らぬが、兎も角現今では朝鮮人の方が小綺麗に住つて居ると思ふ。是れは外觀からも、衛生上からも結構と言つて良からう。又一つ例を擧げる、性は不改に名づくといふ佛敎の解釋に感じた事を申さう、支那人は決して跣足といふことは無い、若し足袋も靴下も穿たねば忽ち罰金刑に處せられる、斯る法律の制裁よりも、支那人は素足で居ると風邪に罹るので如何なる賤民でも脚部を包んで居る。又水中に入ることが出来ない。

滿洲でも朝鮮でも都會地や鐵道の附近は田野遠く開け、農耕の道は頗る開けて居る。作物は米穀もあり、野菜もあるが、米作も多くは陸田であるが、中には水田も有る、茲に面白い事は、滿洲は勿論朝鮮でも、陸穂や野菜は悉皆と申しても宜しい程、漢人の耕作に成つて居る、朝鮮へも多數の漢人が移住して、野菜を耕作する、朝鮮人は夫に押されて、僅かに簡單な從來からの物を作るばかりで、新奇な野菜は漢人の手で出来るのである、勿論新奇な野菜は収益が多いけれども、鮮人は漢人より劣つて居て競争が出来ぬのである。朝鮮でも南部は事情が違ふが、北部は右の様な實況である。然るに滿鮮何れの地でも、水田は悉く鮮人の耕種に成つて居て、漢人は決して水田には入り得ない。隨分利には敏い漢人も水に入つて働くことは尻込みして、鮮人に譲つて居る。他の部分は寒冷にも忍耐の強い漢人が脚部を水に入れることを恐れるのは妙である。之れ果して、天受の性といふものであらうか。

以上の通り予は眞面目を離れて、公平に日人は漢人に勝れ、漢人は鮮人に優れて居ることを感ずる、併

し勝れて居るといふは、決して強いといふのと同意味ではない、或る種の競争には往々優秀者が敗北することがある。東羅馬帝國民は遂に文化劣等の民族の爲に亡ぼされた。蒙古の成吉思汗の爲に文華の花を咲かせて居た宋國も、歐洲諸國も撃ち破られた、暹羅國に於ては一旦成功した日本人も敗滅して、支那人は凱歌を揚げた。漢鮮人は一般に利に敏く、生活に根強い所があり、以て彼の民族の繁榮を來して居る。油斷は大敵である、常に緊張を要する。

朝鮮南部の民族

人種論は予の専門では無いから、深く立ち入つて論ずることは出来ないが、ホンノ通り一偏の所感を述べて見るならば、或は聞いたことを紹介するならば、朝鮮北部の人種は、京城大學の藤田教授などの研究に據ると、即ち古への高句麗の地で今の南滿洲の地に居た人民と同一と見える、樂浪の發掘物などは、勿論漢に置かれた郡の物であるから、其の筈であるが、旅順埠頭の發掘物と大いに關係がある。どうも民族互に相近いに相違ないと思はれる。南部即ち釜山、蔚山等を含む慶尙道邊は古への任那・新羅邊で我が倭人と稱する民族であらう。漢籍の上から見ると、單に倭と云ふこともあるが、倭人・倭國・倭種・倭奴等の語が有つて、倭とは本來地名か國名か民族名か、倭國に棲居する人間か、倭人であるか、倭人が住ぶ國が倭國であるか、本末が分らぬ。予は久しく倭人倭種が本で、倭國が末であらうといふ考を持つて居る、ソシテ早い時代には倭種は日本の西南部及び朝鮮の南部に住して居たと思つて居る。朝鮮南部に居るのが北倭で、日本在住の倭人が南倭であらう。往古即ち史前の幾萬年の古へには、日鮮の土地は陸續きで有つたとの説も萬更信ぜられぬことも無い、左なくとも、今よりは一層海の隔たりが近い、即ち島嶼などが有

つて、同民族が住居して居たと思はれる、有史時代に入つては、既に同民族といふことは忘れて居ても、風俗・習慣・言語等最も近いものがある。日本人は史前悠久なる太古に大陸から半島を経て移住したものであらうが、歴史時代に入つて後も、其の初め頃には出雲民族や、倭人は支那・朝鮮とは頻繁に親密に交通して居たことは間違ひない事實で、史籍に徴することが出来る。殊に朝鮮南部即ち慶尙道邊の民族は所謂倭人と見て差支へなからうと感じた、慶州邊の發掘物が我が發掘物と一見同民族なるべしと感じた。旅順よりは平壤よりは京城・慶州と漸次に我國の品と近いことは、我が九州邊と古代の任那・新羅等と民族が同一であると感じるより外無かつた。且佛國寺などの構造と云ひ、墳墓といひ、其の文化を尋繹して見ると、全く日本と酷似して居る。日本も朝鮮も支那の文化を請益したから、互に相似て居るのかと思ふと、夫れならば京城の宮殿などの如く、支那と酷似して善い譯であるのに、慶州あたりは全く日本流で有つて、日本の大和邊の如き感がある。

言語は流行等に依つて變遷もするが、其の組立の根本は變る者では無い、全く死滅して他の言語に占領せられる場合、即ち滿洲は今日古代の滿洲語は亡びて、漢語を使用して居る如き場合は別として、苟も言語が存在して居る限り、決して其の組立の變更せらるべきものでない。然るに朝鮮語の組立が日本語と同様であることは大いに民族同一の信念を強くする。但し不審なのは發掘物に於て鏡鑑・銅鐸を見受けぬこと、土器も彌生式土器の餘り初期の物が見えず、可なり進んだ時代の物のみを見受けぬことである。是等に就いて如何に説明するか、専門家の説を聞く考へである。

骨骸は人種民族の異同を研究するに、善い手掛りであるが、是れは長い間の交通で混合せられて居る場

合が多く、且之れは餘程綿密な研究を要するので、素通りの觀察や感想では分らぬが、人相が見分けの付かぬ位酷似して居ることは事實である。

家屋の構造等も、支那は多く土壁を以て構築するが、朝鮮は日本の如く木を多く用ゐてある。唯オンドルを以て、暖房するのは支那のカンと同一で有つて、日本とは全然異なつて居る。オンドルは氣持の好い物で經濟上・衛生上にも善いかと思はれる。

宗 教

は餘程注意する積で有つたが、是れも餘り忙しい旅行のために、何の得る所もなく、洵に慚愧の至りである。佛教は何れの地でも東西本願寺・淨土宗・曹洞宗・日蓮宗・古義眞言宗等が布教に熱心して居る。到る處に別院とか教會とか云ふものが設けられて居て、鎬を削る有様である。所に依つては他の諸宗派も入り込んで居る。京城などは都會も大きく、日本内地人も多く住し、交通年限も長く又距離も内地から近い、種々の關係で殆ど各宗派が幾分は手を着けて居る有様である。夫れで特別の事情のある所は例外として、大體に於ては西本願寺が最も盛大ではあるまいかと思つた、夫には種々の原因があらう、第一光瑞上人が大連に常住して、指揮棒を振つて居られるから、能く統一が取れ、且日滿の有力家に交渉の便多く、隱密の間に利益を得ること。第二布教費豊富なること。第三是等地方に進出して居る邦人は中國・九州等の人が多くて、元來が西本願寺の門信徒が多い事などが數へられる。過般天台宗が新たに滿洲國に進出した所、洽爾賓には從來天台宗の大寺が在つて、望外の幸福を得て、喜んだとの事、成る程夫から彼の地の如光師などの來朝が有つて、叡山では歓迎した様で有つた。

神道も天理教などは追々進出して居る、是れも何れ其の中に勢力を得るであらう。

日本では宗教の取扱はして居ないが、邦人の敬神思想は無論宗教的である。否眞の宗教で有つて、邦人は到る處に神社が無くては、満足が出来ず、邦人の集團を爲す所には概ね神社がある。京城とか天津とか撫順とか言ふ地には、官設の大社があるが、其の外に猶小社が澤山私設せられて居る。ソシテ其の祭禮は居留民交際の最も好い機會である。小社と雖も廣漠の土地であるから、境域は廣くて、且樹木を植ゑて居るから愉快である。其の神様は無論内地の有名神社から勸請してあるから、我等が參詣しても故國を偲ぶよすがとなる。居留民が故國を忘れぬ爲に結構であり、外人の信者を生ずる事も行々は出来るかも知れない。此の神社の事は、日本人獨特で朝鮮人には見受けぬ様である。檀君を祭るとか、箕子の墓を崇敬するとか云ふことはあるが、是等は支那でも孔子廟とか關帝廟とかを崇祀すると同じで、日本の神社とは聊か異なつた所があらう。此の日本人の敬神思想こそは、建國の當初より固有する所で、取りも直さず日本精神の根幹である。此の思想も後には不純な考へが交り、自身の心身の不純不潔をも顧みず、唯祈禱でもすれば、福祿を興へたり、病災を拂つたりして下さると思ふやうに成つたが、是れは後世付加はつた雜念雜行で有つて、決して正しき日本精神では無い、純粹のやまとこゝろはソナナ御都合主義の欲張根情ではなくソナナ不純な蟲の善い心底は神様は御嫌ひである。

心だに誠の道にかなひなば

祈らずとも神や守らん

といふ如く、常に神様が守護して下さるのを、身を清め心を淨めて、守護して下さる御恩を報謝するのが、

神祇を拜禮する趣意である。此の禊を爲して身心共に清らかに成つて、報謝の行を勵むのが、眞の敬神眞の大和心である。此の點は佛教でも儒教でも別異は無い。夫故古來菅原道眞でも、和氣清麿でも、大江匡房でも、北畠親房でも我國の偉人は皆神儒佛三道を兼ね信じて居る。明治天皇にも神に關した御製が數多あるが、皆かく明らかに清らかな平らかな誠心を以て、敬神の極意と遊ばしてある、此の心を持つて邁進するならば、如何なる國に行くとも、前途洋々たるものがある。

ツイ脱線して御説法に成つたが、日本人の布教は何れの宗派が成功しても又盛大でも、或は不振でも之れを大所高所より達觀して見れば、畢竟同一であるから、唯何れも不惜身命の決心で努力して貰ひ度い。扱滿洲なり朝鮮なりの固有の宗教は如何であらうか、之れは我國の信者の様子とは餘程様子が違ふから、容易に其の眞相が分り難い、衰へて居る様でもあり、又心底には信仰があるやうにも見える。兎も角昔長い間繁昌した宗教であるから、根柢から人心を去つたとは思へない、これは北支も滿洲も朝鮮も同様である。夫は數は日本内地よりも少いようであるが、兎も角立派な大寺が維持せられて居る、信者が禮佛する法は皆地上に三跪する敬虔なものである。朝鮮でも諸方に大寺が有つて、金剛山などは全山佛寺である。滿洲では吉林などは、京都に比較せられるのは、山水や樹木や地形等自然の天地ばかりでなく、諸宗各派の宗教が揃つて、諸大寺の嚴存することが、京都に酷似して居る點からも言ひ得る。そして寺觀の様子を見るに、何れも相應に立派であるのは頼もしい。

近來紅卍字會や家理教が中々勢力を得て來たとの話である、紅卍字會の會員で本邦人で勢力のあるのは林出外務書記官と大本教の出口王仁三郎氏である。林出氏は温厚の君子人で愉快な話上手であるが、恐る

べきは王仁三郎氏である、同氏は内地でも定評のある腕利きである。間違ひが有るか知らぬが、同氏は世界に三十餘の秘密結社と聯絡を通じて、何か大目論見を立てて居るといふことである。我等は紅十字會とは赤十字社の如きものかと思つて居たらば、左にあらず、一種の神を深く信じ、其の神の指揮命令に従つて、活潑に行動する宗教で、家理教よりは寧ろ上層社會に喰ひ入つて居り、盛に豫言などを爲し、且社會事業などを手廣に行ふ所は、慥かに今日の社會に歓迎せられる組織に成つて居る、王仁氏は深く此の教に喰ひ入つて居る様であるが、何程まで如何なる活動をするか、其の成功を祈つて善いか、將た咀つて善からうか、孰れに致せ注目し値すと云ふべきである。

却説滿洲國最高幹部の宗教に對する思想は如何であらう。我等が鄭國務總理に面會した際の談話にも、宗教に關しては、我々が標榜し實行して居る所の王道政治は、全く信教自由で、一宗一派に後援することは出来ない。併し王道政治は宗教を輕視しないのみならず、大いに必要と感じて居る、夫故在來の宗教も成るべく繁榮することを希望するし、又日本あたりから新來の宗教も大いに發展して、宗教家から王道政治に助力して貰つて、相互扶助の出來ることを切望するといふことを申された。

我々は先にも申した如く、當時執政閣下（滿洲國皇帝陛下）に拜謁をせなかつた、是れは今に遺憾に存じて居るが、友人京都帝國大學名譽教授青柳榮司博士は、其の著「宗教的信仰と教育」の序文に下の如く述べて居る。

旅中七月二十八日（昭和八年）溥儀執政に謁するの光榮に浴したが、この機會に於て私は何か精神的の贈物を捧げたいと念願した結果執政に對し「眞の王道國家を建設する爲めには是非共宗教的信仰が根柢

とならなければならぬ。これ固より御承知のこと、は存するが敢て御參考までに進言致したい」といふ意味のことを申し述べた。すると執政は殊の外満足せられ、「今日まで幾多の人士に接したが誰一人この爲に觸るゝ方はなかつた、全く貴下が始めてである。實は、我祖先たる康熙皇帝が家法として傳へた教訓の第一はこの事に外ならない」との意味を答へられた。そこで私は「それを伺つて實に光榮と感激とに堪へない。以て多幸なる滿洲國の將來をトすべく、洵に祝福措かざる次第であります」と結んで退下せんとしたが感激せられた執政は自ら進んで堅き握手を賜はつたので、私も劣らじと力を籠めて御別れを惜みつゝ、「日滿親善の本體實に茲にあり」と熱誠を捧げたのであつた。

我等は此の文を読んで實に感激に堪へぬから、長々と引證した譯である。絶世の英雄康熙帝の宗教に對せられた事業施設は茲に申し述べるべき場合で無いが、必ず斯る遺詔が有つた事と首肯せられる。康德皇帝陛下がこの祖訓を遵守し、其の軫衷が施政の上に顯現するならば、王道政治は眞に實現して、滿洲帝國の前途は洋々として、萬々歳を祝福すべきである。

康德皇帝陛下及び鄭國務總理の宗教に對する信念が上述の如しとすれば、我國から遙々布教に赴いて居る諸君も實に希望がある譯であるから、大いに奮勵一番爲法不爲身の決心を以て盡力して貰ひたいものである。各宗の本山に於ても一層力瘤を入れて貰ひたい。之れは決して宗教の爲ばかりではなく、日本帝國の爲めである、滿洲帝國の爲めである、東洋平和の爲めである、世界平和の爲めである。日滿親善と口にはばかり唱へても、上は調子では駄目である、心の奥底から結合するには、宗教を以て互に相融合せねば駄目である。

我等歸朝後の形勢は先づ好い方向に進みつゝあるやうである。彼國の高僧達も來朝せられ、我國からも我が大谷派法主台下御夫婦、大覺寺門跡其の他知名の僧侶も澤山渡滿して活躍せられ、刑務所に於ける教誨も、我が布教使に依つて始められ、又衰頹した喇嘛寺院が、熱河あたりでは見るも氣の毒と言はれたが、これも些少なから省廳から保護金が出るやうに成つたといふ事である。

此所で少し大谷派經營の屯田僧の事を申さう、屯田僧の成績が餘り良好で無かつたことは、既に衆知の事柄で、且其の善後所置も濟んで居るから、過去の事を言ふ必要は無いが將來もあゝ言ふ計劃は必要であらう、一度の失敗で恐氣が付いては宜しくない、何事も初度から成功は覺束ないものであるから、今後は調査を十分にし、目論見を確かにして捲土重來して貰ひ度い。又一般に滿洲移民に就いては樂觀悲觀の兩論があるが、我等は悲觀する必要はないと思ふ、且孰れにしても必要である、産兒制限などいふ消極的社會政策は取るべきでない。年々増殖する人口の移殖は何としても必要であるから、必要の前には途も開ける、集團移民が今後盛になるに相違ない、其の中に加はつて僧侶の渡航が是非望ましい、集團中には精神の慰安は最も必要である。娛樂も必要であり、且種々の典禮儀式等の世話することも必要で、昔時の寺子屋の師匠じみた事も必要である。何は兎もあれ、新開地では内地の都會に居る様な心持ではいかぬから、覺悟を極めて出掛ける人が欲しいが、同時に無謀で出掛けないやう、調査は吳々も大切である。大谷派は苦い經驗を嘗めたが他宗派でも慎重に計劃して貰ひ度い。

夫から上に申し落したが、日本の家庭には各戸神棚や佛壇が安置してあり、日夕信奉する所の神佛や祖先や亡き父母等に對して、禮拜する習慣があるのは、風俗を敦厚忠實ならしめる上に就いて、最も善い事である、他國に此の好風俗は無いと、豫て聞いて居たが、滿鮮に於て彼の地の家庭を視察した時分に、實際に視て深く感じたことである。願はくは内地の此の好風俗を滿鮮に移し度いものである。此の紀行も段々長く成つたが、後一回で終りにしよう。

滿洲帝國の成立

緒言。斯様な事を紀行中に收めるは、不似合の様に思はれるが、永々讀者諸君に見えた序に、この事を一言して、餘り能く御存じの無い御方に心得て置いて頂くのも何かの爲になることゝ信じて、序に申し述べる氣分に成つたので、珍しい事もなく又研究した業績といふではなく、普通一般の事を取纏めて御紹介申すのに過ぎないのであります。

亡國といふにも色々種類程度がある。大清帝國は亡びた、獨逸帝國も、露西亞帝國も土耳其帝國も皆亡びた。印度の蒙古耳帝國も亡びた。併し清・露・獨・土の諸帝國の亡びたのは愛親覺羅家や、ロマノフ家や、ホーヘンツォルレルン家や、サルタン等が或は絶滅したとか、帝位を失つたとか云ふに過ぎない。或は易姓革命といふか、或は政體變化といふまでのことで、其の人民、國土、文明、言語其の他一切の組織等は皆繼續して居る。ソビエツト露西亞の社會組織は大いに變化した、併しながら是等諸國は、依然として嚴存して居るから眞の亡國ではない。印度は、土地・人民・文明・宗教等は依然存在して居ても、國語の存在は危ふく、又最も大切な主權は其の國家人民の手を放れ他國に隸屬したのであるから、先づ亡國といふべきであるが、古へのイスラエル人は其の國土を失ひ、民族は四方に散亂して、社會組織も全く失つたの

であるから、是れ亦眞の亡國に近い。併し猶彼等は其の民族は神の選民として、自ら高く標置し、民族互に聲息を通じ、相互間には言語も相通じ、宗教を堅持し、意氣軒昂なるものがある。惟り古への靺鞨女眞・渤海・遼等の國即ち唯今の滿洲國の土地の在り場所に國して居た所の諸國家は眞の亡國である。幾度か興り、幾度か亡び、數千年に亘り、幾度の興亡を繰返したが、要するに一旦は眞の亡國と成つた。彼等は國土を亡され、人民殆ど亡滅散逸し、主權も文明も、國語も死滅し、宗教も社會組織も喪失し、何等固有の或る物を保持せざる亡國亡民と成た。其所で滿洲は今の滿洲帝國勃興以前には一貫した歴史を有しない。高麗・渤海・遼等と斷々に何時興り、何時亡びたといふ興亡の史實はあるが、連続した歴史は無い。それが今度中興の運に際會して、一大帝國が勃興した、洵に奇蹟の如く感ぜられる、是に史を案するに、

肅慎・或は息慎・息慎など書く國が、今の滿洲帝國の土地に國を立て、居たのが最も古いやうである。此の國の歴史は支那歴史で斷片的に拾ふより外ないが、勿論よくは判知らない。其の建國は或は我が皇國の建國よりも古いかも知れない。繼續年間は一千年に垂々んとすると思はれる。其の文明の程度は知れないが、恐らく支那から大なる影響を受けて居たには相違ないが、而も後世の如く、全く支那化したではなく、一種の國語を有し且つ信仰を持つて居たであらう。

高句麗、單に高麗と呼ぶこともある、日本とも可なり交渉の多い國で肅慎が北方松花江流域に本部を置いて居たよりは稍南方に國して居たが、同時に盛えて居たのではなく、肅慎より後に興つたのである。併し今の奉天以南鴨綠江以北位に國として居たゞけに、肅慎を亡ぼして取つて替はつたといふ譯ではない。其の年代は前漢の末頃即ち今を溯ること千八百年位前から、國を建てたと思はれる。

扶餘、は高句麗と相前後して國を建て、今の新京邊に本居を構へて居たらしく思はれる、高句麗と扶餘との關係は随分入組んで居て、今は詳細な研究することは適當でない。扶餘が亡びて後、高句麗の國運は益隆昌で、一時は平壤に都して、領域も大いに擴大せられて、隋唐と事を生じ、隋煬帝・唐太宗の如きは大軍を起して遠征したが、却て敗北した位である。併し結局唐の爲に亡ぼされた。皇國では天智天皇の御宇で、唐では高宗皇帝の時代である。

渤海、此の國は高句麗と同種族、同言語、同文明で、即ち今の純粹の滿洲人で、高句麗に次いで起り、日本とも交渉多く、奈良から平安時代に當つて、國史にも能く顯はれ、特に親密な國で有つた。渤海の版圖は高句麗よりも一層大きく、南は鴨綠江邊から、北は扶餘の故地を包み、松花江流域に至る頗る廣大なものである。五京を構へて、日本との交通には今の浦潮斯德から船を繋して、日本海を横切り、敦賀港に來り、盛に貿易を營んだものである。日本が唐と交通するにも道を渤海に藉りて鴨綠江より山東に上り、長安に至つたこともある。

契丹、は北方から起つて、唐則天武后の時分に南下して、遼西地方に出で、左は渤海國右は支那本部と争ひ、漸次國力増進して、我が醍醐天皇延長五年支那では後唐の明宗の時に渤海を亡ぼした。契丹は後に遼と稱し、武を誇つたけれども、滿洲全土を治むること出來ず、却つて衰運を拓く結果を來した。

金、渤海が亡びたが、滿人が代つて起り、否金は猶數百年前に起つたのであるが、遼が渤海の故地を化外の民として捨置く間に、興隆して遂に遼を滅ぼし、大いに威武を振ふことに成り、白城（哈爾濱の側）に都して漸次國力増進し、支那本部に進出し、宋を南遷せしめ、北支を掩有した事は何人も知る所で大い

に滿人が氣を吐いた時代である。東洋歴史に女眞若くは女直と云つて一時支那に雄視した人種があるが、即ち此の金國の人種である。

元、は蒙古より起つて、金や宋を滅して、絶大の版圖を有し、東西兩洋に雄視した歴史は今述べる必要はない。

清朝、は往時高句麗の起つた地方に近く、即ち渾河の上流地方に起つたもので、愛親覺羅氏の祖先は神話で模糊として判然せぬが、其の勃興するや破竹の勢を以て、支那本部に進出し、明室を亡ぼし、四百餘州に君臨した。是れが滿人の空前絶後の隆盛時代である。併し元來民族として餘り繁殖力強くなく、人口の少ない滿人は殆ど皆帝室に従つて支那本部に移住して、滿洲の土地は無人の地と化した。此所で滿人が武力を以て漢人を壓服して居る間は宜しい、併し漢人は文明に於て、人數に於て、勤勉力に於て、何れの點に於ても滿人よりも優越して居るので、社會的に於ては被征伏者たる漢人は征伏者たる滿人を壓倒するに至つた。清帝室は其の發祥の地を無人の空虚地にして、何時でも歸來出来る場所として、控へ置く積りで、漢人に對しては滿洲の地に入込むことを禁じて、僅かな殘存の滿人のみ、其の地の主として住居せしめた、之れを封禁地と稱した。併し之れは無理である、不自然である。

封禁地、滿洲の封禁地は人少く地肥て居る、捨て、於いても、天然産物が豊富に産出せられる。僅少の滿人のみで之れを始末することは出来ない。一方には利に敏い而も生活に困難して居る漢人が、多數に封禁地の利潤に垂涎して居る。且交通は不便で土地境域は廣大であつて、監視の目は行届かない、そこで邊陲の境界線を越えて、漢人等は滿洲に入込み、扶餘發祥の地たる新京附近に漢人の聚落が出来、開發を始

めた。遂に清朝の封禁時代の末には滿人の滿洲でなく、寧ろ漢人の方が多數に成つた。

清朝滅亡。明治天皇崩御に先だつこと、僅かに半年弱滅滿興漢の旗幟一たび江南の地に翻るや、三百年の社稷も敢なく顛覆するの悲運に際會した、宣統三年（西紀一九一二年）二月十二日只今の滿洲帝國の康德皇帝は大清帝國の帝位を御退位遊ばされた。若し此の際清室に非凡の人傑が有つて、大清帝國皇帝として御退位になるが、關外滿洲の故土は元來帝室の領有せらるべき封域で、支那本部との別の地故、退いて奉天に都し滿洲の地を保有せんと主張したならば、或は當時夙に滿洲國の成立を見たかも知れぬが、機は失ひ易く、唯單に皇帝の虚名を稱し、年金四百萬兩を得て、紫禁城内居住を條件として、退位せられた。是に於て大清帝國も亡びた、が夫よりも滿洲に在る國家即ち肅慎以來幾變遷を経て、兎も角繼續して來た所の滿洲人の國家といふ物は完全に滅亡した。人民は四散して居る、土地は中華民國に領有せられる、國語は亡失して滿人自身すら語ることを得ない、宗教も文明も自身特有の物は無い、洵に氣の毒な事に成り了つた。且つ折角堅き契約の皇帝の優遇條件すら、間もなく馮玉祥の爲に剝奪せられるといふ悲惨極まる状態に成つた。併し天は善人に與するといふ、斯る状態で終局を結ぶものではない。

鄭家屯事件、大清帝國滅亡以來支那本部に於ては、人も知る如く中華民國と公稱し、共和政體を以て國を建て、漢・滿・蒙・藏・疆の五族を統轄し、第一次の大總統として、清朝の遺臣袁世凱が選ばれた。彼れは光緒帝崩御後一旦退官したが、革命亂を好機として、其の舊慮を出で、南京政府と交渉し、宣統帝を退位せしめたといふを功として、此の榮位に推戴せられたのである。之れで彼れは満足して、上は舊主に對して誠意を表し、下萬民に對して恭勤事に當るの態度に出づべきで有つたのに、野望を以て満たされたる彼

れ世凱は天の咎め人の憎みをも顧みず、自ら皇帝の尊位に登らんと欲し、内外を欺瞞し、上下を壓迫し、國會を中止し、反對者を強壓し、年號を立て、洪憲と稱し、貨幣を新鑄して自己の肖像及び洪憲の年號を入れるなど、僭越極まる振舞を爲して居た、これが大正二年三年の事であるが、其の大正三年に世界大戰が勃發して、歐米は混亂し、支那の事などに注意して居る邊が無いので、袁の行動は益露骨となり、革命黨は大いに憤慨する、日本も日英同盟の誼を守つて、獨領膠州灣を占領する等で、袁の天下も茲に亂麻の狀態に陥つた。此の際を機として起つたのが所謂鄭家屯事件で滿洲獨立の壯舉である。

肅忠親王、此の親王の家系は元來蒙古の王族であるが、前清朝廷に於て蒙古懐柔の爲に、優遇して愛親覺羅氏と同一に親王とし皇族待遇を與へたので、深く之れを感謝して清朝に對して忠誠を盡して居た、宣統三年即ち清帝退位の年十二月親王家一族は、潜かに北京を遁れ出で、千辛萬苦を嘗め、秦皇島を経て、旅順に來り、我が都督府の厚き保護を受け、我が志士の援助を得て、碁書を樂み閑雲野鶴を友として、閑日月を送り、徐ろに天下の動向を凝視して居た。恰も好し、上述の如く世界は動亂の巷と化し、支那本部も混亂狀態に陥り、而も流石愛親覺羅氏發祥の地だけ有つて、滿洲には皇室に同情の民も多く、日本志士は川島浪速氏等を首めとして、清帝復辟の建策を爲す者多きを以て、親王も是等の徒に擁せられ、遂に八月義軍を擧げて、當時奉天に君臨して居て張作霖驅逐に取掛り、滿蒙に跨る獨立國を建設し、清帝復辟を目論み、滿洲帝國創設の陳吳と成つた。

事變の經緯を一應略叙するならば、先づ南方支那の討袁軍と聲息を通じ、蒙古の王族と連絡を取らんが爲に、王子憲奎王を蒙古の壯士巴布札布バブチヤブの許に遣はし、將軍の印綬を授け、宣統帝の父君醇親王の許に使

を遣はして、贊襄を求め、軍資金を得ん爲に、親王が滿洲所有の土地を擔保として、借款を大倉喜八郎氏に交渉した。皆其の首尾は上々吉で、中國革命黨は喜んで手を握り、バブチヤブは感激して召に應じ、醇親王は一等伯爵邵榮勳を辦理國事全權代表として派遣され、大倉氏亦百萬圓を提供した。是に於て一同大いに歡び士氣頓に振起した。

巴布札布將軍は蒙兵五千を將ゐてハイラル附近より南下し、洮南を突かんとし、先鋒は先づ洮南鎮守使吳俊陞を突線縣に撃つて之れを破り長春（新京）南方に於て滿鐵沿線に出でんと、朝陽坂に於て奉天軍を破り、破竹の勢を以て、郭家店地帯に進撃した。

捷報に接した大連滯在の俠勇は若月太郎氏に引率せられて、長春城を奪取せんと北進した、然るに目標を我が長春領事の旅行と、我が守備隊の夜間行軍出發の日に定めて居たのに、此の兩事とも延引中止となり、剩さへ同士の武器の一部を官憲に押收せられ、首領邵榮勳は列車に於て何者かに暗殺せられた。蓋し我が外交方針一變した結果であらう。

斯くの如く義舉の計劃は、全部鷗の嘴と喰ひ違ひ、悲憤の涙を呑んで長春に對する運動を放擲した。此の時早くも我が政府は該事件に對して絶對の嚴正中立を聲明した。

斯くなる以上は、何程悲憤慷慨するも追付かず、俠勇蒙兵も戦は利あらず、士氣は阻喪し、此の上は一快戦して潔く屍を戰場に曝すべしと、決心したるも、我が關東都督より、兩軍に撤退を命じて、附屬地の治安維持の爲とて獨立守備隊第一大隊を同地に召集した。此の逆境に處しては、蒙軍は蒙地に引退の止むなきに至り、朝陽坂にて我が送還隊の解くるを待つて居た奉天軍に襲撃せられ、遂に雄將バブチヤブ將軍

を喪ひ、蒙軍潰滅して、アハレ滿蒙王國建設の壯舉も、夢の又夢と解消して仕舞つた。巴將軍戦死の地は林西附近で我が有志が厚意を以て此の地に杏梨を植樹して弔意を表したのが、今は拱するに至り、パプチヤブ公園と稱し、行人の涙を注ぐ所の名所と成つて居る。

其の後肅親王家は依然旅順に棲住せられたが、資産を鄭家屯事件に失ひ、經費は莫大で、生活費にも窮し、二女子をして旅順の公學堂に教鞭を執らしむるに至り、諸王子の通學も親王自身の生活も極度の儉約を行ひ、不遇の歲月を送つて居る間に、大正十一年陰曆三月二日遂に薨去せられた。其の後親王家の有様は言ふに忍びないものがある。唯爾來九年の星霜を経て九・一八事件突發し、滿洲國勃興の状を見しめなかつたのが遺憾である。

爾來日本は舊清帝室に同情を寄せて居ると猜忌するの、將た又日本爲す無きのみと、弱腰を見縊つての事か、張作霖の態度は漸次横暴となり、日本に對して不遜の舉動多く、我が朝野の士人をして切齒せしめて居たが、作霖死後其の子學良は益硬化して、善隣の誼を忘れ、我が滿鐵附屬地住民をして不安措かさらしめたが、遂に昭和六年に至つて九・一八事件が起つた、其の以降の事蹟は人皆記憶に新たなる所であるから此に叙述する必要は無いが、最近の事情は菱刈前軍司令官の聲明書に簡單明瞭に盡されて居る、要するに順天安民の徳を具有せらるゝ康徳皇帝が天の明命を受けて、帝祚に登られて大いに國威を發揚せらるゝ階段が成就したのである。今擱筆するに當つて外務省・文部省大谷派本願寺・南滿洲鐵道會社・北支滿鮮に於ける知人諸君の多大の御援助を深謝し併せて讀者諸君に敬意を表する次第である。

滿洲を如何なる國と人間は、雲にかくるゝ朝日と答へん(完)

日滿佛教協會パンフレット

大谷 瑩 潤 著

佛教の國際化と滿洲佛教政策

既刊

大村 桂 巖 著

滿洲國の宗教教育

未刊

文學博士 本多辰次郎著

北支滿鮮旅行記

既刊

都甲 文 雄 著

滿洲の宗教

未刊

濱田 本 悠 著

滿洲國宗教視察記

未刊

昭和十一年七月 四 日印刷
昭和十一年七月 八 日發行

著者 本多辰次郎

編輯兼 日滿佛教協會
發行人 藤井 晋

印刷者 東京市牛込區早稲田橋町一〇七
吉原 良 三

印刷所 株式會社 康文社印刷所

不許再録

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
發行所 日滿佛教協會本部

電話九段四四二八番
振替東京九八六七二番

北支滿鮮旅行記 (金五十錢)

終

